

文學博士高楠順次郎校閱

立花俊道著

巴利語文典

巴利語文典序

梵語學研究に資すべき書類の世に出づるもの日を逐ふて益々多きを加ふ。西洋及び印度に於ける諸學者の著譯翻刻に係る文典字書或は古文書の類既に世に出たるもの汗牛充棟、而して我邦學者の手に成れる梵書類亦十數の多きに上る。之を修むるの道全く備れるに庶幾しといふべし。昔時梵語學者が漢文字の媒介を通じ悉曇字母をたどりて之を研究したりし日に較れば其難易素より同日の論に非るなり。随つて之を修めんとするもの日に益々多く今日に於ける梵語學の研究は前古無比の盛況にありといふべし。

梵語學の研究は斯の如く易く遂行し得べく且つ其研究は斯の如く盛なるに反し巴利語の研究は其進歩甚だ遅々たるものあり。此語の研究資料としては先年高楠博士の著されたる「巴利語佛教文學講本」の外一もこれあるなし。随つて之を修めんとするには勢ひ外國學者の著書によらざるべからず。一外國語を修むるに他の外國語を通ずるの不便は此に之を縷説するの要なけん。思ふに巴利言語文學研究の盛ならざるは一分此不便あるが爲めならん歟。

巴利語はもと如何なる言語なりしか、釋尊時代の摩竭陀國の國語なりしか、或は又南天某地の方語なりしか、其が如何なる性質の語なりしにせよ、現存せる南方佛教聖典が此語を以て記せらるゝ以上佛教の聖語なりと言はざるべからず。世の學者梵語の佛教と近き關係あることを知りて巴利語の佛教と更に近き關係を有することを覺らず、梵文學といへば直ちに印度佛教文學なりと速斷するに反し巴利語は佛教と縁遠き印度の一方語なるかの如く思へるあり。

巴利語と佛教と近き關係あることを知るも此語と梵語とは亦密なる關係あることを知らざるものあり。是等兩語が如何に密なる關係あるやは巴利語辭典の著者チルダーズ氏が巴利語の單語の五分の二

は梵語と等しいと云へる語に徴して明かなり。單語の上よりいふも文法の上よりいふも是等兩語は極めて親密なる關係を有す、随つて其一に通ずるは他に達する階梯たらずんばあらず。巴利語は入り易くして梵語は達し難き語なり。されば學者若し初めに巴利語を修め後梵語に進むの道を取らば勞小にして得る所大なるものあらんか。

本書は巴利語の文法を簡明平易に説述するの目的を以て草したるものなれば普通巴利及び梵語文典中に載するが如き煩瑣なる理論は努めて之を省き最も廣く用ひらるゝ例題を掲げて其説明に代へたり。是れ巴利語の文法は或意味より言へば極めて不規則なるものにして之を一々縷述せんことは斯かる一小冊子を以てしては到底企及し得べきことならざればなり。此書を成すに當りて参考せる書類頗る多し。就中主として参考したる書は原文にては *Bālāvatāra*, *Mahārūpasiddhi* の二書、英文にては Chas. Duroiselle の *Pāli Grammar* 及び楠氏の「解説梵語學」の四種なり。特に楠氏の「解説梵語學」には著者の負ふ所最も多し術語用辭の大部分は此書より採りたるなり。

本書を草せんとしたる動機は全く高楠博士の慫慂に出づ。之を草するの間博士は常に懇篤なる指導を與へられ、且つ稿成るに及びて親しく校閲の勞を執らる。是れ余の感謝に堪へざる所なり。我宗の耆德弘津説三師亦此舉を賛同し自ら資を投じて之を梓に上るを得しめられたり。茲に記し以て感謝の意を表す。

明治四十三年八月十日

於動坂僑居

立花俊道識

巴利語文典目次

	頁
第一篇 音韻論	1—14
第一章 音の分類 (§1.—§7.).....	1
第二章 母音の連聲 (§8.—§24.).....	3
第三章 父音の連聲 (§25.—§32.).....	8
第四章 空點の連聲 (§33.—§42.).....	9
第五章 音の同化 (Assimilation) (§43.—§56.).....	11
第二篇 語詞論	15—101
(一) 名詞的變化.....	15—45
第一章 概説 (§57.—§65.).....	15
第二章 男性中性名詞形容詞の變化 (§66.—§87.).....	18
第三章 女性名詞形容詞の變化及び其構成法 (§88.—§95.).....	27
第四章 反意の形容詞及び比較形容詞 (§96.—§102.).....	31
第五章 代名詞の變化 (§103.—§111.).....	33
第六章 數詞の變化 (§112.—§122.).....	41
(二) 動詞的變化.....	46—80
第一章 動詞の種類 (§123.—§144.).....	46
第二章 能動調動詞の變化 (§145.—§166.).....	52
第三章 受動調及び狀況調動詞の變化 (§167.—§172.).....	62
第四章 他の動詞相 (§173.—§178.).....	66
第五章 分詞・連續體・不定體 (§179.—§212.).....	69
(三) 語の構成及び合成語.....	81—98
第一章 Kita 語基構成法 (Kitappaccayo) (§213.—§218.).....	81

第二章 Taddhita 語基構成法 (Taddhitappaccayo) (§219. —§223.)	83
第三章 六合釋 (Compound, Samâso) (§224. —§232.)	86
第四章 格 (Kâraṅko) (§233. —§241.)	91
(四) 不轉語 (Nipâtapadam) (§242. —§247.)	99—101

附 錄

Jâtakam	1—12
I. Makhâdeva-Jâtakam	1
II. Nacca-Jâtakam	2
III. Sûkara-Jâtakam	3
IV. Bâveru-Jâtakam	5
V. Matakabhatta-Jâtakam	6
VI. Nigrodhamiga-Jâtakam	8
VII. Uruga-Jâtakam	11

第一篇 音韻論

第一章 音の分類

§ 1. 巴利語 (Pālibhāsā) を言表はすに用ひらるゝ字母 (akkharam) は其數四十一箇あり、母音 (saro) 八、父音 (vyañjanam) 三十二、空點 (niggahitam) 一とす。今之を表を以て示せば

- 1) 母音 a â, i î, u û, e, o.
 - 2) 父音 k kh g gh ñ; c ch j jh ñ; t th d dh n; p ph b bh m; y r l v s h l.
 - 3) 空點 m.
- 是れなり。

§ 2. 八箇の母音の中 a i u の三箇は之を短音 (rasso) と稱し、他の五箇は 之を長音 (dīgho) と稱す。e o の二音は長音なれども複合父音 (saṃyogavyañjanam) の前に來る場合には短音の如く發音せらる。

〔例〕 ettha (此處に) mettā (慈恵) sēyyo (善・利・福) lēddu (土塊) ottho (唇・駱駝) sotthi (福利) mōkkho (解脱) sōppam (睡眠).

§ 3. 三十二箇の父音の中 k より m に至る二十五箇は五箇づゝ之を五群に分ち各群その首音によりて ka 列 (ka-vaggo), ca 列 (ca-vaggo), ta 列 (ta-vaggo), tha 列 (tha-vaggo), pa 列 (pa-vaggo) と稱す。

ka 列	k	kh	g	gh	ñ
ca 列	c	ch	j	jh	ñ
ta 列	t	th	d	dh	n

ta 列 t th d dh n

pa 列 p ph b bh m

§ 4. 各列の第一第二兩音及び s は之を無聲音 (aghoṣa) と稱し、第三第四第五の三音及び y r l v h ḷ は之を有聲音 (ghoṣa) と稱す。m は之を稱して空點 (niggaḥitaṃ) といふ。

§ 5. 各列の第一第三音を無氣音 (appappāṇa) と云ひ第二及び第四音を含氣音 (mahappāṇa) と稱す。

§ 6. 喉音 (kaṇṭhajo) a â, k kh g gh ṇ, h
 顎音 (tālujo) i î, c ch j jh ñ, y
 舌音 (muddhajo) ṭ ṭh ḍ ḍh ṇ, r, l
 齒音 (dantajo) t th d dh n, l, s
 唇音 (oṭṭhajo) u û, p ph b bh m
 喉顎音 (kaṇṭhatālujo) e
 喉唇音 (kaṇṭhoṭṭhajo) o
 齒唇音 (dantoṭṭhajo) v
 鼻音 (nāsiko) ṇ ñ ṇ ṇ m
 空點 (niggaḥitaṃ) ṁ

§ 7. 以上の關係を概括して表示する時は下の如し。

	父 音					母 音				
	無聲音		有聲音			無聲音	有聲音	短母音	長母音	
	無氣音	含氣音	無氣音	含氣音	鼻音					
喉音	k	kh	g	gh	ṇ		h	a	â	e
顎音	c	ch	j	jh	ñ		y	i	î	
舌音	ṭ	ṭh	ḍ	ḍh	ṇm		r, l			
齒音	t	th	d	dh	n	s	l			
唇音	p	ph	b	bh	m			u	û	

第二章 母音の連聲

§ 8. 兩個の音が前後相連なりて生ずる發音上の變化を連聲 (sandhi) といふ。連聲に三種あり、母音連聲 (sarasandhi) 父音連聲 (vyañjanasandhi) 空點連聲 (niggaḥitasandhi) 是れなり。

§ 9. 母音連聲とは兩箇の母音が前後相連なりて生ずる發音上の變化をいふなり。是等兩箇の母音は共に同一語に屬する場合あり、異なる語に屬する場合あり、而して兩音は同じきことあり相異なることあり。

§ 10. 兩箇の同種類の母音相會すれば長音となる。

[例] tatra + ayam = tatrāyam (其處に、此の) a + a = â
 gacchāmi + iti = gacchāmīti (吾行かんとして) i + i = î
 bahu + upakārami (多くの援助) u + u = û
 ñāṇa + āloka = ñāṇāloka (智光) a + â = â

§ 11. 兩箇の母音相會する時は前母音 (pubbasara) 時として消滅す。

[例] loka + aggo = lok + aggo = lok'aggo (世界の主) a + a = a
 atha + eko paribbājako = ath + eko paribbājako =
 ath'eko paribbājako (時に一人の遊行僧あり) a + e = e
 saddhā + indriyam = saddh + indriyam = saddh'indriyam
 (信根) â + i = î
 bhikkhunī + ovādo = bhikkhun + ovādo = bhikkhun'ovādo
 (比丘尼の教誡) î + o = o

§ 12. 兩箇の異なる母音相會する時は後母音 (parasara) 時として消滅す。

[例] chāyā + iva = chāyā + va = chāyā'va (影の如く) â + i = â
 cakkhu + indriyam = cakkhu + ndriyam =

cakkhu'ndriyam (眼根)

u+i=u

assamanî+asi=assamanî+si=assamanî'si (汝は非沙門尼なり)

i+a=i

§ 13. i î, u の三音若し他の異なる母音の後に来る時は前二音は時として e に變じ u は時として o に變ず。

[例] bandhussa+iva=bandhusseva (親族の...の如く) a+i=e
j'na+îrito=jinerito (佛所説の) a+i=e
canda+udayo=candodayo (月出) a+u=o
na+upeti=nopeti (近づかず) a+u=o

§ 14. 兩母音相會して前母音消滅する時後母音時として長音に變ずることあり。

[例] saddhâ+idha=saddh+îdha=saddhîdha (信仰は、此處に) â+i=î
idâni+aham=idân+âham=idânâham (今吾) i+a=â
tathâ+upamam=tath+ûpamam=tathûpamam (其に比喻すべき) â+u=û

§ 15. 兩母音相會して後母音消滅する時前母音時として長音に變ずることあり。

[例] lokassa+iti=lokassâ+ti=lokassâti (世界の.....と) a+i=î
vi+atinâmeti=vî+tinâmeti=vîtinâmeti (時を過す、住む) i+a=î
sâdhu+iti=sâdhû+ti=sâdhûti (善哉とて) u+i=û

§ 16. 語の終にある e は母音若し其次に来る時は時として y に變ずることあり。

[例] te+ajja=t+y+ajja=tyajja (彼等今日) e+a=ya
putto te+aham=putto t+y+aham=putto tyâham
(吾は汝の子) e+a=yâ

§ 17. 語の終にある u 若しくは o は母音若し其次に来る時は時として v に變ずることあり。

[例] so+assa=s+v+assa=sv'assa (彼は其の) o+a=va
so+eva=s+v+eva=sv'eva (彼こそ) o+e=ve
anu+eti=an+v+eti=anv'eti (随ひ行く) u+e=ve

[例外] ko+attho=ko attho (何の意ぞ) (§ 22)
so+ayam=so+yam=so'yam (此の彼れ) (§ 12)
sâdhu+âvuso=sâdh+âvuso=sâdh'âvuso (善哉友よ)
(§ 11)

§ 18. i î の兩音は母音若し其次に来る時は時として y に變ずることあり。

[例] vutti+assa=vutt+y+assa=vuttyassa (彼の行爲) i+a=ya
vi+añjanam=v+y+añjanam=vyañjanam (父音) i+a=ya

§ 19. i の前に ta 列の音ありて他の母音若し其次に来る時は i は前なる父音と共に其父音と同位の ca 列の音に變ず。

[例] iti+evam=iccevam (と斯の如く) t+i=cc
ati+odâto=accodâto (極めて淨白なる)
yadi+evam=yajjevam (若し斯の如くなれば) d+i=jj
bodhi+angam=bojjhangam (覺支) (§ 30) dh+i=jjh

§ 20. i が ti の後に来る場合は上節の連聲法によらず、兩音相合して長音となるのみ (§ 10)。

[例] ati+ito=atîto (古昔の)
iti+idam=itîdam (と此の)

§ 21. 語の終に母音ありて他の母音若し其次に来る時は y, v, m,

d, n, t, r, l, g 等の諸音時として其間に添加せらるゝことあり。

[例] 1. na + imassa = na + y + imassa = nayimassa (此の……なし) +y

bodhi + eva = bodhi + y + eva = bodhiyeva (菩提こそ)

2. ti + aṅgikam = ti + v + aṅgikam = tivaṅgikam (三分の) +v

pa + uccati = pa + v + uccati = pavuccati (稱せらる)

3. lahu + essati = lahu + m + essati = lahumessati (速に行かん) +m

idha + āhu = idha + m + āhu = idhamāhu (此處に彼等言へり)

4. atta + attham = atta + d + attham = attadattham (己利) +d

puna + eva = puna + d + ev = punadeva (再び)

5. ito + āyati = ito + n + āyati = itonāyati (是より以後) +n

6. ajja + agge = ajja + t + agge = ajjatagge (今日より始めて) +t

tasmā + iha = tasmā + t + iha = tasmātiha (故に此處に)

Childers は之を分解して tasmā + iti + ha とす。此解是なるに似たり。若し然りとすれば之は § 12 にて論すべきものなり。但此處には舊來語典家の例に倣ひて此條下に之を收めたり。

7. sabbhi + eva = sabbhi + r + eva = sabbhireva (善人とのみ) +r

(参照: 梵 sat + bhiḥ + eva = sad + bhir + eva = sabbhireva)

ni + antaram = ni + r + antaram = nirantaram (常に)

(参照: 梵 nīr + antara = nirantara)

8. cha + abhiññā = cha + l + abhiññā = chaḷabhiññā (六通) +l

(参照: 梵 śaṣ + abhiññā = śaḍ + abhiññā = śaḍabhiññā)

9. putha + eva = putha + g + eva = puthageva (別々にのみ) +g

(参照: 梵 pṛthak + eva = pṛthag + eva = pṛthageva)

§ 22. 兩箇の母音相會し時として 何等の變化をも生ぜざることあり。

[例] cha + abhiññā = cha abhiññā (六通) a + a = a a

gāthā + abhāsi = gāthā abhāsi (偈を唱へたり)

ā + a = ā a

putha + eva = putha eva (別々にのみ)

a + e = a e

§ 23. 前置詞 abhi 及び adhi は母音若し其次に来る時は 夫れ夫れ abbh 及び ajjh に變ず。

[例] abhi + uggato = abbh + uggato = abbhuggato (騰上する) abhi = abbh

abhi + okāso = abbh + okāso = abbhokāso (野外)

adhi + esati = ajjh + esati = ajjhesati (求む)

adhi = ajjh

adhi + agamā = ajjh + agamā = ajjhagamā (達せり)

§ 24. 前置詞 pati は母音又は父音若し其次に来る時は 時として paṭi に變ずることあり。

[例] pati + aggi = paṭi + aggi = paṭaggi (返し火) (§ 11)

pati + paṭi

pati + haññati = paṭi + haññati = paṭihaññati (打たる)

第三章 父音の連聲

§ 25. 父音連聲とは母音が其次に来る父音と會して生ずる發音上の變化を言ふ。此例に於て母音及び父音は異なる語に屬する場合あり、或は又相會して一語をなす場合あり。

§ 26. 語の終に短母音ありて父音若し其次に来る時は母音は時として長音に變ずることあり。

[例] khanti + paramam = khantī paramam (堪忍は最上なり)
du + rakkho = dūrakkho (難守の)

§ 27. 語の終にある長母音は父音若し其次に来る時は時として短音に變ずることあり。

[例] yadivā + sāvake = yadiva sāvake (若しは諸聲聞を)
taṇhā + khayo = taṇhakkhayo (愛盡) (§ 30)
pā + eva = pa + g + eva = pageva (如何に況んや) (§ 21, 9)

(参照: 梵 prāk + eva = prāg + eva = prāgeva)

§ 28. 語の終にある母音は父音若し其次に来る時は時として何等の變化をも起さざることあり。

[例] so dhammam deseti (彼法を説く)
tuṇhī + bhūto = tuṇhībhūto (默然たる)

§ 29. ta, eta 等の代名詞の男性主格單數形の so 及び eso は父音若し其次に来る時は時として夫れ夫れ sa 及び esa となる。

[例] so muni = sa muni (彼れ智者)
so bhikkhu = sa bhikkhu (彼れ比丘)
eso dhammo = esa dhammo (此法)

§ 30. 母音の次に来る父音は時として重ねらるゝことあり。五列

の始めの四音、母音の次に来りて重ねらるゝことあれば無氣音の前に来るものは同じ無氣音にして含氣音の前に来るものは亦同種類の無氣音なり。

[例] yathā + kamam = yathākkamam (次第に)
idha + pamādo = idhappamādo (此處に、放逸は)
mahā + bhayaṃ = mahabbhayaṃ (大恐怖) (§ 27)
anu + sarati = anussarati (追憶す)

§ 31. 語の終に母音ありて父音其次に来る時は o 其間に添加せらるゝことあり。

[例] para + sahaṣṣam = para + o + sahaṣṣam = parosaṣṣam
(一千以上) (§ 11)
atippage + kho tāva = atippage + o + kho tāva = atippago
kho tāva (尙ほ早きに過ぐ) (§ 11)
或 atippa + g + o + kho tāva = atippago kho tāva (§ 21, 9)

§ 32. 前置詞 ava は父音若し其次に来る時は時として o に變ずることあり。

[例] ava + naddho = onaddho (掩はれたる)
ava + kâso = okâso (空間)

第四章 空點の連聲

§ 33. 空點連聲とは空點が其次に来る母音若しくは父音と會して生ずる發音上の變化を言ふ。斯かる例に於て空點及び母音又は父音は各々相異なる語に屬することあり、或は共に同一語に屬する場合あり。

§ 34. 五列の音の一が、空點の次に来る時は空點は時として同列の鼻音に變ず。

- [例] $kin + kato = kin\dot{k}ato$ (何をか爲せる) $\dot{m} + k = \dot{n}k$
 $sa\dot{m} + j\dot{a}to = sa\dot{n}j\dot{a}to$ (出生せる) $\dot{m} + j = \dot{n}j$
 $sa\dot{m} + thito = sa\dot{n}thito$ (住立せる) $\dot{m} + th = \dot{n}th$
 $ta\dot{m} + dhanam = ta\dot{n}dhanam$ (其財) $\dot{m} + dh = \dot{n}dh$
 $ta\dot{m} + mittam = ta\dot{m}mittam$ (其友を) $\dot{m} + m = mm$

1 若し空點の次に來る時は空點は時として 1 に變ず。

- [例] $pu\dot{m} + li\dot{n}gam = pu\dot{l}li\dot{n}gam$ (男性) $\dot{m} + l = ll$
 $sa\dot{m} + la\dot{p}o = sa\dot{l}la\dot{p}o$ (語話)

§ 35. 語の終に空點ありて母音若し其次に來る時は空點は時として m 又は d に變ず。

- [例] $dha\dot{n}am + e\dot{v}a = dha\dot{n}ame\dot{v}a$ (貨財こそ) $\dot{m} + e = me$
 $eta\dot{m} + a\dot{v}oca = eta\dot{d}a\dot{v}oca$ (之を言へり) $\dot{m} + a = da$

(参照: 梵 $etad + avocat = etadavocat$)

§ 36. 語の終に空點ありて e 若しくは h 若し其次に來る時は空點は時として ñ に變ず。e の場合にありては ñ は重ねらる。

- [例] $ta\dot{m} + e\dot{v}a = ta\dot{n}\dot{n}e\dot{v}a = ta\dot{m}e\dot{v}a$ (それぞ) (§ 35) $\dot{m} + e = \dot{n}\dot{n}e$
 $ta\dot{m} + hi = ta\dot{n}hi$ (それは實に) $\dot{m} + h = \dot{n}h$

§ 37. 語の終に空點ありて y 若し其次に來る時は兩音共に時として ñ に變ずることあり。

- [例] $sa\dot{m} + yo\dot{g}o = sa\dot{n}\dot{n}o\dot{g}o$ (一致・纏結) $\dot{m} + y = \dot{n}\dot{n}$
 $ya\dot{m} + ya\dot{m} e\dot{v}a = ya\dot{n}\dot{n}ade\dot{v}a$ (§ 35)

§ 38. 語の終に母音ありて母音若しくは父音其次に來る時は空點時として其間に添加せらるゝことあり。

- [例] $ca\dot{k}khu + a\dot{n}icca\dot{m} = ca\dot{k}khu\dot{m} a\dot{n}icca\dot{m}$ (眼無常) $+ \dot{m}$
 $ava + siro = ava\dot{m}siro$ (低頭)

§ 39. 語の終に空點ありて母音若し其次に來る時は空點は時として消滅す。

- [例] $vi\dot{d}\dot{u}na\dot{m} + agga\dot{m} = vi\dot{d}\dot{u}n + agga\dot{m} = vi\dot{d}\dot{u}nagga\dot{m}$ (智者の最) (§ 11) $- \dot{a}m$
 $ta\dot{s}a\dot{m} + a\dot{h}a\dot{m} = ta\dot{s}a + a\dot{h}a\dot{m} = ta\dot{s}a\dot{h}a\dot{m}$ (吾は其等の) (§ 10) $- \dot{m}$

§ 40. 語の終に空點ありて父音若し其次に來る時は空點は時として消滅す。

- [例] $buddha\dot{n}am + sa\dot{s}ana\dot{m} = buddha\dot{n}asa\dot{s}ana\dot{m}$ (諸佛の教誡) $- \dot{m}$
 $sa\dot{m} + ra\dot{g}o = sa\dot{r}a\dot{g}o$ (染著) (§ 26)

§ 41. 空點の後に來る母音は時として消滅す。

- [例] $ta\dot{m} + a\dot{p}i = ta\dot{m}'pi$ (其も亦) $- a$
 $bi\dot{j}a\dot{m} + i\dot{v}a = bi\dot{j}a\dot{m}'va$ (種子の如く) $- i$

§ 42. 空點の後に來る母音若し消滅する時は其母音の後に來る複合父音の一亦時として消滅す。

- [例] $eva\dot{m} + as\dot{s}a = eva\dot{m} + ssa = eva\dot{m}'sa$ (斯の如く彼の) $- as$

第五章 音の同化 (Assimilation)

§ 43. 音の同化とは兩箇の父音の前後相連なりて生ずる發音上の變化を言ふなり。後なる語の初にある父音の前なる語の最後の父音に同化せらるゝ場合と、前なる語の最後の父音が後なる語の初めの父音に同化せらるゝ場合との二類あり。前者を前進的同化 (Progressive Assimilation) と云ひ後者を後退的同化 (Regressive Assimilation) と云ふ。

$lag + na = lagna = lagga$

$tap + ta = tapta = tatta$

§ 44. 音の同化は受動調、過去分詞、第三種動詞、不定體、連續體、

義務分詞, 希求法動詞等の語基を構成する上に多く起るものなり。

§ 45. ka列の音は次なる ta列の音を同化する。

lag + na = lagna = lagga

sak + no + ti = saknoti = sakkoti

§ 46. ch, j, s (梵語に轉換すれば ś 又は ś となるもの) 等に終れる語は kita 語基構成音 ta と會して ttha となる場合多し。

pucch + ta = putttha

maj + ta = mattha

tus + ta = tuttha (梵: tuṣ + ta = tuṣṭa)

is + ta = ittha (梵: iṣ + ta = iṣṭa)

nas + ta = nattha (梵: naś + ta = naṣṭa)

bhas + ta = bhattha (梵: bhraṁś + ta = bhraṣṭa)

§ 47. c 及び j は時として次なる t に同化せらるゝことあり。

muc + ta = mutta

yuj + ta = yutta

vi + vic + ta = vivitta

rañj + ta = ratta

§ 48. t 若し dh の後に來る時は其同化は前進的なり。即ち t は dh に同化せられて d となり次に其位置を轉換す。

kudh + ta = kudh + da = kud + dha = kuddha

budh + ta = budh + da = bud + dha = buddha

§ 49. t 若し bh の後に來る時は其同化は後退的なり。即ち bh は先づ t に同化せられて自己と同位の齒音 dh となり t は d となり後其位置を轉換す。

â + rabh + ta = â + radh + ta = â + rad + dha = âraddha

labh + ta = ladh + ta = lad + dha = laddha

§ 50. k, p 兩音若し ta列の無聲音の前に來る時は前者は後者に同化せらる。

sak + ta = satta

sak + thi = satthi

gup + ta = gutta

sup + ta = sutta

§ 51. kita 語基構成音 na 若し r 又は d に終れる語根の後に來る時は na は是等を同化し r の場合に於ては之と共に nna となり d の場合に於ては之と共に nna となる。

car + na = cinna (語根の母音 a は i となる) (梵: cîrṇa)

pûr + na = punna (語根の母音 û は短音となる) (梵: pûrṇa)

â + kir + na = âkinna (梵: âkîrṇa)

bhid + na = bhinna

khid + na = khinna

pa + sad + na = pasanna

§ 52. ya は前進的同化法により前なる父音に同化せらる。

(1) pac + ya = pacya = pacca

(2) yuj + ya = yujya = yujja

(3) bhañ + ya = bhanya = bhañña

(4) khâd + ya = khâdya = khâjja

(5) mad + ya = madya = majja

(6) budh + ya = budhya = bujjha

(7) khan + ya = khanya = khañña

(8) labh + ya = labhya = labbha

(9) gam + ya = gamya = gamma

(10) div + ya = divya = dibba

(11) pas + ya = pasya = passa

§ 53. r は多く其次に來る音に同化する。

kar + tabba = kattabba

kar + tu = kattu

dhar + ma = dhamma

§ 54. r は時として削除せられ前なる短母音は長音となる。

kar + tabba = kâtabba

kar + tum = kâtum

§ 55. h 若し y 又は鼻音 n の前に来る時は其位置を轉換す。

ava + ruh + ya = oruhya = oruyha (§ 32)

gah + na = gahṇa = gaṇha

sah + ya = sahya = sayha

§ 56. li + t は ḍh となり更に lh となる。

muh + ta = mûḍha = mûlha

ruh + ta = rūḍha = rūlha

第二篇 語詞論

(一) 名詞的變化

第一章 概 説

§ 57. 巴利語の言語に變化するものと變化せざるものとの二種あり。其變化するものとは名詞(nāmam), 形容詞(visesapadam), 代名詞(sabbanāmam), 數詞(saṅkhyāsaddo), 動詞(ākhyātapadam)等にして變化せざるものとは副詞, 接續詞, 間投詞等の不轉語(nipātapadam)を謂ふ。變化する言語の中 名詞, 形容詞, 代名詞, 數詞等は之を一括して名詞的變化の品詞と稱し此篇に於て之を説明すべし。

§ 58. 巴利語の名詞は左の如き要素より成る。

1. 語根 (dhātu) 悉曇學者の所謂字界是れなり。buddh (覺る)。
2. 接尾音 (paccayo) 悉曇學者の字縁と稱するものは是れなり。buddh + ta = buddha (覺れる) の例に於ける ta の如し (§ 48)。
3. 語尾 (vibhatti) buddha + ssa = buddhassa (覺者の) の例に於ける ssa の如し (§ 66)。

語尾に二種あり。名詞的語尾(nāmikavibhatti) 動詞的語尾(ākhyātavibhatti) 是れなり。但此篇に於ては専ら前者に就て論じ動詞的語尾の變化は後に至りて之を述ぶべし。

4. 接頭音 (upasaggo) は語根の前に來りて語根固有の意義を強くし若しくは之を變化するものなり。sam + buddho = sambuddho (正覺者), pa + buddho = pabuddho (覺めたる) の sam 及び pa の如し。

語根に接尾音を添加したるものを語基 (pātipadiko) と云ふ。
 budh + ta = buddha は語基なり。

§ 59. 名詞は語基、性 (līṅgaṃ), 數 (vacanaṃ), 格 (vibhatti) の相違によりて其變化を異にす。

§ 60. 形容詞は自己の語基とその形容する名詞 (visessapadaṃ) の性、數、格に随つて變化す。

§ 61. 名詞の語基に七種あり。

1. a purisa (人), citta (心)
2. ā kaññā (幼女)
3. i aggi (火), ratti (夜), atthi (骨)
4. ī dandī (有杖者), nadī (河)
5. u bhikkhu (比丘), yāgu (粥), āyu (壽)
6. ū jambū (閻浮樹)
7. o go (牛).

§ 62. 形容詞の語基に五種あり。

1. a bāla (愚なる), taruṇa (若き), dīgha (長さ)
2. i bhūri (夥多の), kāmī (欲ある)
3. ī pāpī (罪ある), kopī (怒れる), anukampī (慈念ある)
4. u garu (重き), sādhu (好き), bahu (多くの)
5. ū viññū (明智ある), niddālū (眠好きの).

§ 63. 性に三種あり。男性 (pullīṅgaṃ) 女性 (itthilīṅgaṃ) 中性 (napuṃsakalīṅgaṃ) 是れなり。上節に擧げたる例の中 purisa, aggi, dandī, bhikkhu, 及び go 等は男性にして kaññā, ratti, nadī, yāgu 及び jambū 等は女性 citta, atthi, āyu 等は中性に屬す。

§ 64. 數に二種あり。單數 (ekavacanāṃ) 複數 (bahuvacanāṃ) 是れなり。

單數

複數

buddho (一佛)

buddhā (諸佛)

guṇavā (一具德者)

guṇavantā (諸具德者)

nārī (一婦人)

nāriyo (諸婦人)

gehaṃ (一家)

gehāni (諸家)

§ 65. 格に八種あり。悉曇家の所謂八例又は八轉聲なり。

1. 體格 (paṭhamāvibhatti) が、は

[例] buddho virocati (佛は光る)

2. 呼格 (ālapana-vibhatti) よ

[例] buddha, maṃ pālaya (佛よ、吾を護れ)

3. 用格 (dutiya-vibhatti) を、に

[例] buddhaṃ vandāmi (吾れ佛を拜す)

4. 具格 (tatiya-vibhatti) にて、を以て、によりて

[例] buddhena desito dhammo (佛によりて説かれたる法、佛所説之法)

5. 爲格 (catutthī-vibhatti) へ、に、の爲めに

[例] buddhāya cīvaraṃ dadāmi (吾れ佛に衣服を奉る)

6. 從格 (pañcamī-vibhatti) より、から

[例] buddhasmā pabhā niccharati (佛より光明發す)

7. 屬格 (chatthī-vibhatti) の

[例] buddhasa sāsanaṃ (佛の教)

8. 於格 (sattamī-vibhatti) にて、に於て

[例] buddhasmim pasannacittaṃ (佛に於て(佛を)信ずる心) 是れなり。

つ
よ
う
に
て
、
か
い
も
を
に
て

第二章 男性中性名詞形容詞の變化

§ 66. a 語基男性名詞 purisa (人) の變化。

	單	複
體	puriso	purisâ
呼	purisa, purisâ	purisâ
用	purisam	purise
具	purisena	purisebhi, purisehi
爲	purisâya, purisassa	purisânam
從	purisâ, purisamhâ, prisasmâ	purisebhi, purisehi
屬	purisassa	purisânam
於	purise, purisamhi, purisasmim	purisesu

a 語基男性名詞形容詞にして其特殊の變化を示さざるものは多く此語に準じて變化するものと知るべし。 sura (天) nara (人) nâga (龍) yakkha (藥叉) peta (餓鬼) mâtanga (象) turaṅga (馬) sîha (獅子) âloka (光明) câga (捨) saṅgha (僧伽) kodha (憤) pûga (檳榔子) campaka (薔薇花) mayûra (孔雀) hamsa (鷺鳥); asama (無等の) bâla (愚なる) eira (永き) gilâna (病める) kovida (熟練なる) manda (遲鈍なる) 等此語に準じて變化す。

§ 67. a 語基中性名詞 citta (心) は體格の單數及び體呼用三格の複數を除き他は凡て purisa と其變化を同じうす。後節中に擧ぐべき一群を除き他の a 語基中性名詞形容詞は凡て citta に準じて變化す。

	單	複
體	cittam	cittâ, cittâni
呼	...	cittâni
用	...	citte, cittâni

puñña (善事) pâpa (惡事) phala (果) ghâna (鼻) kâraṇa (因) dâna (施物) jhâna (禪那) bala (力) maṅgala (吉祥) paduma (赤蓮) vana (林園) pañña (葉) indriya (根) nagara (都府) maraṇa (死) kula (族); 中性形容詞 bâla (愚なる) kovida (熟練なる) manda (遲鈍なる) 等 citta に準じて變化す。

§ 68. a 語基中性名詞 mana (心) 具爲從於四格の單數のみ citta と變化を異にす。

	單	數
具	manasâ, manena	
爲	manaso, manassa	
從	manasâ, manâ, manamhâ, manasmâ	
於	manasi, mane, manamhi, manasmim	

sira (頭) ura (胸) teja (火焰) raja (塵埃) oja (光) vâya (壽) paya (水) yasa (名稱) tapa (苦行) vaca (語) ceta (思) 等は mana と變化を同じくす。

§ 69. a 語基男性名詞 atta (自我・神・自性) の變化。 *anatta = 無我*

	單	複
體	attâ	attâno
呼	atta, attâ	attâno
用	attânam, attam	attâno
具	attena, attanâ	attanebhi, attanehi
爲	attano	attânam
從	attanâ, attamhâ, attasmâ	attanebhi, attanehi
屬	attano	attânam
於	attani	attanesu

§ 70. a 語基男性名詞 rāja (羅闍・王) は體呼用三格の單複數のみ atta と變化を同じくす。

	單	複
具	raññā, rājena	rājūbhi, rājūhi, rājabhi, rājehi
爲	rañño, rājino	raññam, rājūnam, rājānam
從	raññā, rājamhā, rājasmā	rājūbhi, rājūhi, rājabhi, rājehi
屬	rañño, rājino	raññam, rājūnam, rājānam
於	raññe, rājini, rājamhi, rājasmin	rājusu, rājesu

§ 71. ntu 語基男性名詞 guṇavantu (有德者)の變化。

	單	複
體	guṇavā	guṇavanto, guṇavantā
呼	guṇavam, guṇava, guṇavā	guṇavanto, guṇavantā
用	guṇavantam	guṇavante
具	guṇavatā, guṇavantena	guṇavantebhi, guṇavantehi
爲	guṇavato, guṇavantassa	guṇavatam, guṇavantānam
從	guṇavatā, guṇavantamhā, guṇavantasmā	guṇavantebhi, guṇavantehi
屬	guṇavato, guṇavantassa	guṇavatam, guṇavantānam
於	guṇavati, guṇavantamhi guṇavate, guṇavantasmim	guṇavantesu

kulavā (有族の・貴族の) yasavā (名譽ある) sutavā (多聞の)
balavā (有力の) silavā (戒徳ある) satimā (思念ある) mutimā
(知覺ある) hirima (廉恥心ある) rucimā (喜ある) cakkhumā (眼
ある) bandhumā (親族ある) hetumā (因ある) khānumā (木株
ある) bhagavā (薄伽梵・祥者) 等は guṇavā に準じて變化す。

§ 72. ntu 語基中性名詞 guṇavantu の變化は體格の單數と體呼用
三格の複數を除くの外全く男性の guṇavantu の變化に同じ。

	單	複
體	guṇavam	guṇavantā, guṇavantāni
呼	...	guṇavantā, guṇavantāni
用	...	guṇavante, guṇavantāni
...	...	...

§ 73. 此一群及び次節に擧ぐべき gacchanta, mahanta 等の一群は
純然たる名詞にあらず、半名詞半形容詞なり。此等が男性名詞
の意義を表はし若しくは之を形容する場合には 男性變化に 随
ひ中性名詞の意義を表はし若しくは之を形容する場合には 中性
變化に 随ふ。此語の女性形に就ては後章に至りて之を述ぶべし。

guṇavā puriso 有徳の人
so guṇavā 彼れ有徳者
guṇavam cittam 有徳の心

ntu 語基は梵語にては nt なれば語典家中之を 父音に終る語
基の一種として論ずるものあれども巴利語には父音語基の語あ
らざれば茲に其變化を擧げたり。尙ほ是等の語基の最終音は u
なれば之を u 語基の語と見る方然るべきに 似たれど體格單數
の形が guṇavā にして attā, rājā 等の a 語基男性名詞と 等し
きより是等の語に次ぎて其變化を示すを語典家の常例となす。

§ 74. a 語基男性名詞 gacchanta (行く) の變化は體格單數のみ男
性 guṇavantu と異なり他は全く相等し。

	單	複
體	gaccham, gacchanto	...
...	...	...
...	...	...

maham (奉ずる) caram (彷徨する・遊行する) tittam (住立す
る) dadam (與ふる) bhuñjam (食ふ) suṇam (聞く) vacam (語
る) jayam (勝つ) jiram (老ゆる) cavam (死する) saram (記憶
する) japam (呟やく) vajam (往く)。

§ 75. a 語基中性名詞 gacchanta の變化は中性 gunavantu の變化に同じ。

§ 76. i 語基男性名詞 aggi (火) の變化。

	單	複
體	aggi	aggi, aggayo
呼	aggi	aggi, aggayo
用	aggiṃ	aggi, aggayo
具	aggiṇā	aggiḃhi, aggihi
爲	aggino, aggissa	aggiṇaṃ
從	aggiṇā, aggimhā, aggismā	aggiḃhi, aggihi
屬	aggino, aggissa	aggiṇaṃ
於	aggimhi, aggismim	aggiṣu

i 語基男性名詞にして aggi と其變化を同じうする主要なる名詞を挙げれば

joti(火) pāṇi(手) kali(争闘) sāli(粳米) bodhi(菩提樹) rāsi(積集) isi(仙人) muni(牟尼・智者) maṇi(摩尼) giri(山) kavi(詩人) kapi(猿) ahi(蛇) bali(供物) pati(夫) ari(敵) sāmī(主) añjali(合掌) samādhi(三摩地・定); bhūri(夥多の), kāmī(欲ある)(形)等

§ 77. i 語基男性名詞 ādi (原始・本初) の變化は於格單複數を除き他は凡て aggi と同じ。

	單	複
...	...	...
於	ādim, ādo, ādimhi, ādismin	ādisu, ādisu

§ 78. i 語基中性名詞 atthi (骨) は體呼用三格の複數及び於格の單數を除くの外は其變化全く aggi に同じ. i 語基中性名詞は凡て此に準じて變化するものと知るべし. satthi (股) dadhi(酪) vāri(水) akkhi(眼) acchi(眼) acci(日光); bhūri(夥多の)(形)等.

	單	複
體	...	atthini, atthi
呼	...	atthini, atthi
用	...	atthini, atthi
...	...	...
於	atthini, atthimhi, atthismin	...

§ 79. i 語基男性名詞 daṇḍi (有杖者) の變化。

	單	複
體	daṇḍi	daṇḍi, daṇḍino
呼	daṇḍi	daṇḍi, daṇḍino
用	daṇḍinaṃ, daṇḍim	daṇḍi, daṇḍino
具	daṇḍinā	daṇḍibhi, daṇḍihi
爲	daṇḍino, daṇḍissa	daṇḍinaṃ
從	daṇḍinā, daṇḍimhā, daṇḍismā	daṇḍibhi, daṇḍihi
屬	daṇḍino, daṇḍissa	daṇḍinaṃ
於	daṇḍini, daṇḍimhi, daṇḍismim	daṇḍisu, daṇḍisu

hatthi(手ある・象) pakkhi(翼ある・鳥) ratthi(國ある・王) sāmī(財ある・主) sasi(兔ある・月) sikhī(冠ある・孔雀) senānī(軍帥・將軍)等は daṇḍi と其變化を同じくす. 是等は何れも純然たる名詞にあらず, 形容詞より轉化したる名詞なりと知るべし. 上記の諸語の如きは普通, 名詞として用ひらるゝ場合多けれども此他 dhammā (有法の) saṅghī(有衆の) ñāṇī(有智の) chatti(有傘の) mālī(有華蔓の) kāmī(有欲の) dhajjī(有幢の)の如きは寧ろ形容詞として用ひらるゝ場合多し. 是等の語の男性の事物を意味する場合には此節の變化に隨ひ中性の事物を意味する場合には次節の變化に準ず.

§ 80. i 語基中性名詞 daṇḍi は體用兩格の單複數と 呼格の複數とを除き他は悉く男性の daṇḍi と其變化を同じうす。

	單	複
體	daṇḍi	daṇḍini, daṇḍī
呼	...	daṇḍini, daṇḍī
用	daṇḍim	daṇḍini, daṇḍī
...	...	...

§ 81. u 語基男性名詞 bhikkhu (比丘) の變化。

	單	複
體	bhikkhu	bhikkhavo, bhikkhū
呼	bhikkhu	bhikkhave, bhikkhavo, bhikkhū
用	bhikkhum	bhikkhavo, bhikkhū
具	bhikkhunā	bhikkhūbhi, bhikkhūhi
爲	bhikkhuno, bhikkhussa	bhikkhūnam
從	{bhikkhunā, bhikkhumhā, bhikkhusmā	bhikkhūbhi, bhikkhūhi
屬	bhikkhuno, bhikkhussa	bhikkhūnam
於	bhikkhumhi, bhikkhusmim	bhikkhusu bhikkhūsu

setu (橋) ketu (旗) Rāhu (阿修羅王) bhānu (日輪) saṅku (杙)
velu (竹) bandhu (親族) Meru (須彌); garu (重き)(形) sādhu (好き)
(形) 等其變化 bhikkhu に準ず。

§ 82. u 語基男性名詞 jantu (生物・人) は體呼用三格の複數のみ
bhikkhu と異なり他は全く相等し。

	單	複
體	...	jantū, jantavo, jantuno, jantuyo-
呼	...	jantū, jantavo, jantuno, jantuyo-
用	...	jantū, jantavo, jantuno, jantuyo-
...	...	...

§ 83. u 語基中性名詞 āyu (壽) 亦體呼用三格の複數のみ bhikkhu
と異なり他は全く相等し。

	單	複
體	...	āyūni, āyū
呼	...	āyūni, āyū
用	...	āyūni, āyū
...	...	...

cakkhu (眼) vasu (富) dhanu (弓) dāru (木材・薪) tipu (錫) madhu
(蜜) vatthu (物) matthu (乳精); garu (重き)(形) bahu (多き)(形) 等
之に同じ。

§ 84. u 語基男性名詞 satthu (師) の變化。

體	satthā	satthāro
呼	sattha, satthā	satthāro
用	satthāram	satthāre, satthāro
具	satthārā	satthārebhi, satthārehi
爲	satthu, satthuno, satthussa	satthārānam, satthānam
從	satthārā	satthārebhi, satthārehi
屬	satthu, satthuno, satthussa	satthārānam, satthānam
於	satthari	satthāresu

nattu (孫) kattu (作者) bhattu (夫) sotu (聞者) ñātu (識者)
jetu (勝者) dātu (施者) dhātu (持者) bodhu (覺者) viññāpetu (告
げ教ふるもの) 等 satthu に準じて變化す。

§ 85. u 語基男性名詞 pitu (父) は大部分に於て satthu と其變化を
異にす。

體	...	pitāro
呼	...	pitāro
用	pitaram	pitare, pitāro
具	pitārā, pitunā, petyā	pitarebhi, pitarehi, pitūbhi, pitūhi
爲	...	{pitārānam, pitānam, pitūnam, pitunnānam

	單	複
從	pitara, pitunā, petyā	pitarebhi, pitarehi, pitūbhi, pitūhi
屬	...	{ pitarānam, pitānam, pitūnam, pitunnām
於	...	pitaresu, pitūsu

bhātu(兄弟); mātu(母) dhātu(姉妹)等亦之に準ず。但し mātu, dhātu の場合にありては爲屬二格の單數に語尾 yā を取る形あり (§§ 88, 91)。

§ 86. ū 語基男性 abhibhū (勝者) の變化。

體	abhibhū	abhibhuvo, abhibhū
呼	abhibhū	abhibhuvo, abhibhū
用	abhibhum	abhibhuvo, abhibhū
具	abhibhunā	abhibhūbhi, abhibhūhi
爲	abhibhuno, abhibhussa	abhibhūnam
從	{ abhibhunā, abhibhumhā, abhibhusmā	abhibhūbhi, abhibhūhi
屬	abhibhuno, abhibhussa	abhibhūnam
於	abhibhumhi, abhibhusmā	abhibhūsu

sayambhū (自存せる・佛の別號) Vessabhū (毗婆浮佛) parābhibhū (他に勝てる) sahabhū (共有せる) sabbaññū (一切智者) rattaññū (多時を経たる) kataññū (恩を知れる) tattaññū (眞理を知れる) atthaññū (義を知れる) viññū (上智の) vidū (解了せる) vedagū (吠陀を知れる) pārāgū (彼岸に達せる)。是等は凡て形容詞にして名詞にあらず、ū 語基男性語の變化を示す便宜の爲め此に擧げたるのみ。

§ 87. o 語基男性名詞 go (牛) の變化。

	單	複
體	go	gāvo
呼	go	gāvo

	單	複
用	gāvuṃ, gāvaṃ, gavaṃ	gāvo
具	gāvena, gavena	gobhi, gohi
爲	gāvassa, gavassa	gavaṃ, gunnaṃ, gonam
從	{ gāvā, gavā, gāvamhā, gavamhā, gāvasmā, gavasmā	gobhi, gohi
屬	gāvassa, gavassa	gavaṃ, gunnaṃ, gonam
於	{ gāve, gave, gāvamhi, gavamhi, gāvasmim, gavasmim	gosu

第三章 女性名詞形容詞の變化 及び其構成法

§ 88. ā 語基女性名詞 kaññā (少女) の變化。ā 語基女性名詞形容詞の變化は凡て之に準ず。saddhā (信仰) paññā (智慧) vijjā (明) mucchā (解脱) taṇhā (愛) ejā (欲愛) māyā (幻術) mettā (慈) jivhā (舌) Gaṅgā (恒河) gāthā (偈陀・頌) vedanā (受) Laṅkā (楞伽島) khattiyā (刹帝利女) guhā (窟); bālā (愚なる) (形) taruṇā (若き) (形) dūrā (遙かなる) (形) 等。

	單	複
體	kaññā	kaññā, kaññāyo
呼	kaññe	kaññā, kaññāyo
用	kaññam	kaññā, kaññāyo
具	kaññāya	kaññābhi, kaññāhi
爲	kaññāya	kaññānam
從	kaññāya	kaññābhi, kaññāhi
屬	kaññāya	kaññānam
於	kaññāya, kaññāyam	kaññāsu

§ 89. i 語基女性名詞 ratti (夜) の變化。

	單	複
體	ratti	ratti, rattiyo, ratyo
呼	ratti	ratti, rattiyo, ratyo
用	rattim	ratti, rattiyo, ratyo
具	rattiyâ, ratyâ	rattibhi, rattîhi
爲	rattiyâ, ratyâ	rattinam
從	rattiyâ, ratyâ	rattibhi, rattîhi
屬	rattiyâ, ratyâ	rattinam
於	{rattiyâ, ratyâ, rattiyam, ratyam, rattam, ratto	rattîsu

patti (歩兵) vutti (行爲) khanti (忍辱) santi (寂靜) iddhi (神通) bodhi (智) pîti (喜) nandi (歡喜) koṭi (俱眠) diṭṭhi (見) tutṭhi (満足) cuti (死) aṅguli (指) 此他 i 語基の女性名詞は凡て此語に準して變化す。

§ 90. i 語基女性名詞 nadi (小河) の變化は體用於三格の單數を除き他は凡て ratti に同じ。nadyo = najjo, nadyâ = najjâ, nadyam = najjam (§ 52).

	單	複
體	nadi	nadi, nadiyo, najjo
呼	nadi	nadi, nadiyo, najjo
用	nadiyam, nadim	nadi, nadiyo, najjo
具	nadiyâ, najjâ	nadibhi, nadihi
爲	nadiyâ, najjâ	nadinam
從	nadiyâ, najjâ	nadibhi, nadihi
屬	nadiyâ, najjâ	nadinam
於	najjam, nadiyam, nadiyâ	nadîsu

mahî (地) vetaraṇî (地獄の川) kadali (芭蕉樹) kumârî (王女) brâhmaṇî (婆羅門婦) gandhabbî (乾闥婆女) devî (天女) sîhî (牝

獅子) kâkî (雌鳥); bhûriṇî (夥多の) (形) 等 凡て i 語基女性名詞形容詞は此語に準じて變化す。

§ 91. u 語基女性名詞 yâgu (粥) 及び û 語基女性名詞 jambû (閻浮樹) は共に kaññâ に準じて變化するものなり。

單 { (體) yâgu; (具爲從屬) yâguyâ; (於) yâguyâ, yâguyam
(體) jambû; (具爲從屬) jambuyâ; (於) jambuyâ, jambuyam

§ 92. 巴利語の名詞の性は多くの場合に於て天然の性に随ふものなれども devatâ (天子) の如く語形は女性にして男性の意味を有するものあり, mātugâmo (婦女) dāro (妻) の如く語形は男性にして其意義は女性的のものあり, 同一義を含める語の形の異なるに随ひ其性を異にする場合あり, 中性の意義を有する語の文法上男女兩性何れかに屬する例亦極めて夥し. 去れば文法上の性は必ずしも 實際上の性と一致せざるものなりと知るべし. 是等は一々茲に續述するに違あらず, 字書若しくは他の委しき文法書に就き之を解すべし。

§ 93. 男性名詞より女性名詞を構成するに七種の異なる方法あり。

1. a 語基を â 語基となす。

aja (牡山羊)	ajā (牝山羊)
eḷaka (牡羊)	eḷakā (牝羊)
kokila (雄妙聲鳥)	kokilā (雌妙聲鳥)

2. a 語基男性の語にして aka に終るものは之を ikā に變ず。

paribbājaka (普行出家)	paribbājikā (女普行出家)
kumāraka (王子・幼兒)	kumārikā (王女・幼女)
upāsaka (優婆塞)	upāsikā (優婆夷)

3. 男性語基 a を î に變ず。

sāmaṇera (沙彌)	sāmaṇerî (沙彌尼)
manussa (男・人)	manussî (女)
yakkha (夜叉)	yakkhî (夜叉尼)

4. ntu 語基の語は之を *tī* 又は *ntī* に變じて女性語基を造る。斯の如くして造られたる女性語の變化は *nadī* の變化に同じ。

guṇavantu (有徳の)	guṇavatī, guṇavanti
mahantu (大なる)	mahatī, mahanti
dhīmantu (賢なる)	dhīmatī, dhīmanti

5. 語基 *a* を *inī* に變ず。

rāja (王)	rājīnī (女王)
kumbhakāra (陶家)	kumbhakārīnī (陶家婦)
yakkha (夜叉)	yakkhīnī (夜叉尼)

6. 男性語の終に *nī* を附加し其前なる母音若し長き時は之を短音に變ず。

bhikkhu (比丘)	bhikkhunī (比丘尼)
bandhu (男親族)	bandhunī (女親族)
medhāvī (賢士)	medhāvinī (賢婦人)
tapassī (行者)	tapassinī (女行者)
dhammacārī (正行者)	dhammacārīnī (女正行者)

7. 男性語の語尾を *ānī* とす。

mātula (伯父)	mātulānī (伯母)
khattiya (刹帝利種)	khattiyānī (刹帝利女)
gahapati (居士)	gahapatānī (主婦)

- § 94. 或男性名詞は之に對する二種若しくは三種の女性名詞を有す。

atthakāma	atthakāmā, atthakāminī
kumbhakāra	kumbhakārā, kumbhakārīnī
yakkha	yakkhī, yakkhīnī
nāga	nāgī, nāginī
miga	migī, miginī
sīha	sīhī, sīhinī

vyaggha	vyagghi, vyagghinī
mānusa	mānusā, mānusi, mānusinī

- § 95. 普通形容詞より女性形容詞を構成するには其形容詞の語基若し *a* なる時は之を *ā* に又は *i* に變じ *i ī*, *u ū* なる時は更に *nī* を附加し其前なる長音 *i* には *ū* は夫れ夫れ短音 *i* 及び *u* に變ずべし。

		男	女
a	bāla (愚なる)	bālo	bālā
	pāpa (罪ある)	pāpo	pāpī
i	bhūri (夥多の)	bhūri	bhūrīnī
ī	esī (詮索する)	esī	esinī
u	garu (重き)	garu	garuṇī
ū	viññū (明智ある)	viññū	viññuṇī

斯の如くして造りたる女性形容詞の中 *ā* 語基のものは其變化 *kaññā* に準じ, *i* 語基のものは凡て *nadī* に準ず。

第四章 反意の形容詞及び比較形容詞

- § 96. 名詞形容詞の語頭に *a* (若し形容詞の始めの音が母音なる時は *an*) を附加すれば原形と正反對の意義を有する形容詞となる。

garu (重き)	a + garu = agaru (重からざる・輕き)
bala (力ある)	a + bala = abala (力なき・弱き)
cira (久しき)	a + cira = acira (久しからざる)
sama (等しき)	a + sama = asama (等しからざる)
anta (終)	an + anta = ananta (終なき)
āsava (漏)	an + āsava = anāsava (無漏の)
eka (一)	an + eka = aneka (一ならざる・多くの・種々の)

§ 97. 巴利語の形容詞の比較級及び最上級を構成する方法に二種あり。

1. 原級即ち形容詞の男性語基に tara 及び tama を附加して夫れ夫れ比較級及び最上級となす。

原級	比較級	最上級
suci (清淨なる)	sucitara (一層清淨なる)	sucitama (最も清淨なる)
pāpa (罪ある)	pāpatara (一層罪ある)	pāpatama (最も罪ある)
digha (長さ)	dighatara (一層長さ)	dighatama (最も長さ)

2. 原級即ち形容詞の男性語基に iya 又は iyya 及び ittha 又は issika を附加して夫れ夫れ比較級及び最上級となす。

原級	比較級	最上級
pāpa (罪ある)	pāpiya, pāpiyya (一層罪ある)	pāpittha, pāpissika (最も罪ある)
hippa (疾き)	hippiya, hippiyya (一層疾き)	hippittha, hippissika (最も疾き)
kattha (悪しき)	katthiya, katthiyya (一層悪しき)	katthittha, katthissika (最も悪しき)

§ 98. 第二種比較級及び最上級を構成する場合には原級語基の最後の母音は母音連聲の法則によりて消滅す (§ 11 参照)。

§ 99. 比較級并に最上級形容詞の變化は原級形容詞と同じく男性にては purisa, 中性にては citta, 女性にては kaññā の變化に準ず。sucitaro, sucitamo; sucitaram, sucitamam; sucitarā, sucitamā 等。

§ 100. 原級形容詞の用格の單數形は多く副詞として用ふことを得。

hippa (疾き) hippam (疾く)

sukha (幸なる)	sukham (幸に)
sīgha (疾き)	sīgham (疾く)
manda (徐々たる)	mandam (徐々として)

§ 101. 原級形容詞の語頭に ati を加へて絶対最上級の形容詞を形成することを得。

atikhippa (極めて疾き)
atippasattha (極めて勝れたる)
atithoka (極めて僅少なる)

§ 102. 不規則なる比較の例。

原級	比較級	最上級
antika (近き)	nediya (一層近き)	nedittha (最も近き)
bālha (強き)	sādhiya, sādhiyya (一層強き)	sādhittha (最も強き)
appa (僅かなる)	kaniya (一層僅かなる)	kaniṭṭha (最も僅かなる)
yuva (若き)	kaniya (一層若き)	kaniṭṭha (最も若き)
vuddha (老いたる)	jeyya (一層老いたる)	jettha (最も老いたる)
pasattha (勝れたる)	seyya (一層勝れたる)	settha (最も勝れたる)
garu (重き)	gariya (一層重き)	garittha (最も重き)

第五章 代名詞の變化

§ 103. 巴利語の代名詞に五種あり。

1. 人稱代名詞。

amha 吾 tumha 汝 ta 彼

2. 指示代名詞。

ta 其の, 此の, 其もの eta 此の, 此もの ima 此の, 彼の,
此もの asu 其の, 彼のもの

3. 關係代名詞.

ya その..... するもの (なるもの)

4. 疑問代名詞.

kim 何? 孰れ? 誰れ?

5. 不定代名詞.

eka 一の, 或る, 同じき, 單獨の

§ 104. 是等の外巴利語典家が代名詞 (sabbanāman) として取扱ひ
來れるもの十三種あり. 是等は代名詞的形容詞にして純然たる
代名詞にあらず. 今之を舊來語典中に示せる順序に隨ひ配列す
る時は下の如し.

1. sabba (凡ての, 一切; 各自) sabbo jano (一切群生)
sabbe sttā (一切有情)
2. katarā (何の? 孰れの?) katarāṇi piṭakāṇi (孰れの藏を?)
3. katama (何の? 孰れの?) katamo devaloko (何れの天人世界?)
4. ubhaya (二の, 雙の; 兩者) ubhayam'pi, e'etaṇi puññañca
pāpañca (此等の二, 善業と惡業と)
5. itara (他の, 異なる) dve itarā gāthā (他の二偈)
6. añña (他の, 異なる) añño koci (他何者も)
7. aññatara (或る, 他の; 某) aññataro puriso (或る人)
8. aññatama (或る, 他の; 某) aññatamo kuṭumbiko (某居士)
9. pubba (初の, 前の, 古昔の; 東の) pubbo kālo (前時)
10. para (他の, 異なる; 隔りたる) paro loko (他生)
11. apara (他の, 後の, 次の; 西の) aparo nayo (他の方便)
12. dakkhiṇa (右方の; 南の) dakkhiṇā disā (南方)
13. uttara (上の, 高き; 北の) uttarā disā (北方)

pubba, apara, dakkhiṇa, uttara の四語の如きは共に方位を示

す形容詞にして普通の意味の代名詞に非ず. 但先例に倣ふて
此處に擧げたるのみ.

§ 105. 人稱代名詞の變化.

1. 第一人稱代名詞 amha 吾

單

複

體	aham	mayam, amhe (no)
用	maṃ, mamaṃ	amhākaṃ, amhe (no)
具	mayā (me)	amhehhi, amhehi (no)
爲	mama, mayham, amham, mamaṃ (me)	amhākaṃ, amhe (no)
從	mayā	amhehhi, amhehi
屬	mama, mayham, amham, mamaṃ (me)	amhākaṃ, amhe (no)
於	mayi	amhesu

2. 第二人稱代名詞 tumha 汝

單

複

體	tvam, tuvaṃ	tumhe (vo)
用	taṃ, tavaṃ, tvam, tuvaṃ	tumhākaṃ, tumhe (vo)
具	tvayā, tayā (te)	tumhehhi, tumhehi (vo)
爲	tava, tuyham, tumham (te)	tumhākaṃ, tumhe (vo)
從	tvayā, tayā	tumhehhi, tumhehi
屬	tava, tuyham, tumham (te)	tumhākaṃ, tumhe (vo)
於	tvayi, tayi	tumhesu

{ me, no; te, vo は amha, tumha の略形として用ひらるゝことあり.
但し此略形は決して (1) 文章の始めに來ることなく (2) 且つ ca,
ve, vā 等の不轉語 (nipāto) と並び用ひらるゝことなし.

體 gāmaṃ no gaccheyyāma (吾等村里に去らん)
用 pahāya vo gamissāma (吾等汝等を棄てゝ去らん)
具 kataṃ me athavā mayā (吾によりて爲されたる)
kataṃ te athavā tayā (汝によりて爲されたる)

爲 dhamman vo bhikkhave desissāmi (比丘等吾汝等の爲めに法を説かん)

屬 ayam me putto (とは吾子なり)

idam te rattham (之は汝の國なり)

3. 第三人稱代名詞 ta 彼 性の相違によりて其變化を異にす。男性女性の體格單數と女性爲格屬格於格の單數複數を除き右の外に na の形を取る。

	男	中	男	中
	單		複	
體	so	nam, tam	ne, te	ne, te, nāni, tāni
用		nam, tam	ne, te	ne, te, nāni, tāni
具	nena, tena		nebhi, tebhi, nehi, tehi	
爲	nassa, tassa		nesam, nesānam, tesam, tesānam	
從	namhā, tamhā, nasmā, tasmā		nebhi, tebhi, nehi, tehi	
屬	nassa, tassa		nesam, nesānam, tesam, tesānam	
於	namhi, tamhi, nasmin, tasmim		nesu, tesu	

女

	單	複
體	sā	nā, nāyo, tā, tāyo
用	nam, tam	nā, nāyo, tā, tāyo
具	nāya, tāya	nābhi, tābhi, nāhi, tāhi
爲	tissāya, tissā, tassā, tāya	tāsam, tāśānam
從	nāya, tāya	nābhi, tābhi, nāhi, tāhi
屬	tissāya, tissā, tassā, tāya	tāsam, tāśānam
於	tissam, tassam, tāyam	tāsu

§ 106. 指示代名詞の變化。

1. 指示代名詞 ta 其もの

此代名詞の變化は三性を通じ人稱代名詞 ta の變化に同じ。

2. 指示代名詞 eta 此もの 男性體格の單數に於て eso 中性體格の單數に於て etam 女性體格の單數に於て esā の形を取る。此外女性爲格屬格の單數を除き他は三性を通じて ta の變化に同じ。但 ta の場合に於けるが如く na の變形なし。

女
單

爲	etissāya, etissā, etāya
屬	etissāya, etissā, etāya

3. 指示代名詞 ima 此もの, 彼もの

	男	中	男	中
	單		複	
體	ayam	idam, imam	ime	ime, imāni
用	imam	idam, imam	ime	ime, imāni
具		anena, iminā		ebhi, ehi, imebhi, imehi
爲		assa, imassa		esam, esānam, imesam, imesānam
從		asmā, imamhā, imasmā		ebhi, ehi, imebhi, imehi
屬		assa, imassa		esam, esānam, imesam, imesānam
於		asmin, imamhi, imasmim		esu, imesu

女

體	ayam	imā, imāyo
用	imam	imā, imāyo
具	imāya	imābhi, imāhi
爲	assāya, assā, imissāya, imissā, imāya	imāsam, imāśānam
從	imāya	imābhi, imāhi
屬	assāya, assā, imissāya, imissā, imāya	imāsam, imāśānam
於	assam, imissam, imāyam	imāsu

4. 指示代名詞 asu 此もの, 彼もの

	單			複		
	男	中	女	男女	中	
體	asu, amuko	adum	asu, amu	amû, amuyo	amû, amûni	
用	<u>amum</u>	<u>adum</u>	<u>amum</u>	<u>amû, amuyo</u>	<u>amû, amûni</u>	
具	amunâ		amuyâ		amûbhi, amûhi	
爲	amuno, amussa		amussâ, amuyâ		amûsam, amûsânam	
從	amumhâ, amusmâ		amuyâ		amûbhi, amûhi	
屬	amuno, amussa		amussâ, amuyâ		amûsam, amûsânam	
於	amumhi, amusmin		amussam, amuyam		amûsu	

§ 107. 關係代名詞 ya

	單		複	
	男	中	男	中
體	yo	yam	ye	ye, yâni
用	yam	yam	ye	ye, yâni
具		yena		yebhi, yehi
爲		yassa		yesam, yesânam
從		yamhâ, yasmâ		yebhi, yehi
屬		yassa		yesam, yesânam
於		yamhi, yasmin		yesu
		女		
體		yâ		yâ, yâyo
用		yam		yâ, yâyo
具		yâya		yâbhi, yâhi
爲		yassâ, yâya		yâsam, yâsânam
從		yâya		yâbhi, yâhi
屬		yassâ, yâya		yâsam, yâsânam
於		yassam, yâyam		yâsu

§ 108. 疑問代名詞 kim 何? 孰れ? 誰? 三性通じて其變化全く ya に準ず。

男 ko, ke; kam, ke, 中 kam, ke kâni; kam, ke kâni
 女 kâ, kâ kâyo; ^{Kam} kâ, kâ kâyo 等

§ 109. 不定代名詞 eka 數一箇を意味する場合には常に單數の形を取り「或る, 同じき, 單獨の, 他の」等の意味を有する場合には單複雙方共に變化す。其變化は三性通じて全く關係代名詞 ya に等し。男 eko, eke; ekam, eke 中 ekam, eke ekâni; ekam, eke ekâni 女 ekâ, ekâ ekâyo; ekam, ekâ ekâyo 等

§ 110. sabba, katarâ, katama, ubhaya, itara, añña, aññatara, aññatama の八代名詞は其變化男性にては purisa, 中性にては citta, 女性にては kaññâ に準ず。但男性單數にては爲格從格於格に於て複數にては體格呼格爲格屬格に於て purisa と異なれり。中性にては名詞形容詞の場合に於けると等しく體格の單數と體呼用三格の複數のみ男性變化と異なれり。此語の女性の變化に於て kaññâ と異なる點は爲格屬格の單數複數と於格の單數とのみなり。

	單		複	
	男	中	男	中
體	sabbo	sabban	sabbe	sabbâni
呼	sabba, sabbâ		sabbe	sabbâni
用	sabban		sabbe	sabbâni
具	sabbena		sabbebhi, sabbepi	
爲	sabbassa		sabbesam, sabbesânam	
從	sabbamhâ, sabbasmâ		sabbebhi, sabbepi	
屬	sabbassa		sabbesam, sabbesânam	
於	sabbamhi, sabbasmin		sabbesu	

女

	單	複
體	sabbâ	sabbâ, sabbâyo
呼	sabbe	sabbâ, sabbâyo
用	sabbam	sabbâ, sabbâyo
具	sabbâya	sabbâbhi, sabbâhi
爲	sabbassâ, sabbâya	sabbâsam, sabbâsânam
從	sabbâya	sabbâbhi, sabbâhi
屬	sabbassâ, sabbâya	sabbâsam, sabbâsânam
於	sabbassam, sabbâyam	sabbâsu

§ 111. pubba, para, apara, dakkhina, uttara 等五代名詞の sabba と變化を異にする點は男性にありては從格於格の單數、女性にありては呼格の單複兩數のみ。他は三性通じて sabba に同じ。

男

單

...	
從	pubbâ, pubbamhâ, pubbasmâ.
...	
於	pubbe, pubbamhi, pubbasmin.

女

單

複

...		
呼	pubbâ	pubbe, pubbâyo
...		

第六章 數詞の變化

§ 112. 基數及び順數を順序に隨ひ記する時は

基數 (男性體格單數)	順數	半數
1. eko	paṭhama	
2. dve, duve	dutiya	diyaddha, divaddha ($2 - \frac{1}{2} = 1\frac{1}{2}$) - と半
3. tayo	tatiya	addhatiya, addhateyya ($3 - \frac{1}{2} = 2\frac{1}{2}$) 二と半
4. cattāro	catuttha	addhuddha ($4 - \frac{1}{2} = 3\frac{1}{2}$) 三と半
5. pañca	pañcama	
6. cha	chaṭṭha	
7. satta	sattama	
8. aṭṭha	aṭṭhama	
9. nava	navama	
10. dasa	dasama	
11. ekādasa		
12. dvādasa, bārasa		
13. terasa, telasa		addhatelasa ($13 - \frac{1}{2} = 12\frac{1}{2}$) 十二と半
14. cuddasa, coddasa, catuddasa		
15. pañcadasa, pañnarasa		
16. solasa, sorasa		
17. sattarasa, sattadasa		
18. aṭṭhārasa, aṭṭādasa		

19. ekūnavīsati, ekūnavīsam (eka-ūna-vīsati (vīsam))
 (20-1=19 (二十少一))
 20. vīsati, vīsam
 21. ekavīsati, ekavīsam
 22. dvevīsati
 23. tevīsati
 24. catuvīsati
 25. pañcavīsati
 26. chavīsati
 27. sattavīsati
 28. aṭṭhavīsati
 29. ekūnatimsati
 30. timsati, timsā
 31. ekatimsati, ekatimsā
 32. dvattimsati, dvattimsā
 40. cattālīsam, cattārīsam
 50. paññāsa, paññāsa
 60. saṭṭhi
 70. sattati
 80. asīti
 90. navuti
 100. satam
 200. dvasatam
 1,000. sahaṣsam
 10,000. dasasahaṣsam, nahutam
 100,000. lakkham
 10,000,000. koṭi 零七

pakoṭi	零十四	aṭṭatam	零八十四
koṭippakoṭi	零二十一	sogandhikam	零九十一
nahutam	零二十八	uppalam	零九十八
ninnahutam	零三十五	kumudam	零百〇五
akkhohiṇi	零四十二	puṇḍarikam	零百十二
bindu	零四十九	padumam	零百十九
abbudam	零五十六	kathānam	零百二十六
nirabbudam	零六十三	mahākathānam	零百三十三
ahamam	零七十	asaṅkheyyam	零百四十
ababam	零七十七		

§ 113. eka. 數詞としての eka の變化は § 109 中に擧げたる變化の單數形のみを取れば可なり。

eko rukkho (一木) ekā latā (一蔓樹) ekam gharam (一伽藍)

§ 114. dve. dve 以下の數詞は意義上語形上共に複數なるべきこと勿論なれども vīsati, timsati, timsā の如く意義の上よりは複數なるべくして語形上單數的變化を爲すものあり。

	男	中	女
體用		dve, duve	
具從		dvībhi, dvīhi	
爲屬		dvinnam, duvinnam	
於		dvīsu	

§ 115. tayo は三性各形を異にす。

	男	中	女
體用	tayo	tīni	tisso
具從		tībhi, tīhi	
爲屬		tiṇṇam, tiṇṇannam	tissannam
於		tiṇṇam, tiṇṇannam	tissannam

§ 116. cattāro

	男	中	女
體用	cattâro, caturō	cattâri	catasso
具從	catûbhi, catûhi		
爲屬	catunnam		
於	catûsu		

§ 117. pañca 以下 atthârasa に至る十四の數詞は左の變化に準ず。

	男中女	男中女
體用	pañca (五)	dasa (十)
具從	pañcabhi, pañcahi	dasabhi, dasahi
爲屬	pañcannam	dasannam
於	pañcasu	dasasu
[例]	pañca khandhâ (五蘊) pañca gatiyo (五道)	pañca indriyâni (五根)

§ 118. ekûnavîsati, vîsati, timsati 等の如く i に終る數詞は之に伴なへる名詞が如何なる性たるに關せず ratti に準じて女性單數的變化をなし timsâ, cattârisâ 等の如く â に終る數詞は亦 kaññâ に準じて女性單數的變化を爲す。但し其前に他の數詞來りて其複數の意を表はす時は其語形亦複數となる。

[例] timsati bhikkhû (三十の比丘)
asîtiyâ mahâtherânâ (八十太長老の) (屬格)
dve vîsatiyo buddhadantâ (四十の佛齒)
tisso vîsatiyo dinaghatikâ (六十の日分)
(ghatikâ とは一晝夜を十六分したる一分を言ふ)

§ 119. ekûnavîsati (十九), timsati (三十)

	男中女	男中女
體	ekûnavîsati	timsati
用	ekûnavîsatim	timsatim

具爲從屬	ekûnavîsatiyâ	timsatiyâ
於	ekûnavîsatiyam	timsatiyam
§ 120. timsâ (三十), cattârisâ (四十)		
體	timsâ	cattârisâ
用	timsam	cattârisam
具爲從屬	timsâya	cattârisâya
於	timsâyam	cattârisâyam

§ 121. satam (百), sahasam (千), lakkham (洛叉. 十萬) 等は中性 a 語基名詞 citta の單數と其變化を同うす。但し其前に他の數詞ありて其複數の意義を表はす時は語形亦複數となる。

[例] dve satâni 二百
satthi sahasâni 六萬

§ 122. 順數の語基を記すれば

	男中	女
第一	paṭhama	paṭhamâ
第二	ḍutiyā	ḍutiyâ
第三	tatiyā	tatiyâ
第四	catuttha	catutthî
第五	pañcama	pañcamî
第六	chaṭṭha	chaṭṭhî
第七	sattama	sattamî 等.

以下男性中性にありては基數詞語基に ma を附し女性にありては mî を附す。順數の變化は男性にては purîsa, 中性にては citta, 女性にては kaññâ 及び nadî に準ず。

paṭhamo vayo (人生の第一期).
paṭhamam cittam (最初の心).
paṭhamâ vibhatti (第一格. 體).

(二) 動詞的變化

第一章 動詞の種類

§ 123. 動詞は名詞と同じく語根、接尾音、語尾、接頭音等の要素より成り (§58) 人稱 (puriso), 數 (vacanam), 調 (karako), 言 (padam) 及び時又は法 (vihhatti) の差違によりて其變化を異にす。

§ 124. 動詞の人稱に三種の別あり。第一人稱 (uttamapuriso), 第二人稱 (majjhimapuriso), 第三人稱 (paṭhamapuriso) 是れなり。舊來の語典家は 第三人稱を初めに置き第一人稱を最後に置くを例とせり。

§ 125. 數に二種あり。單數 (ekavacanam), 複數 (bahuvacanam) 是れなり。

§ 126. 調に三種あり。能動調 (kattukarako) 受動調 (kammakarako) 状況調 (bhāvakarako) 是れなり。能動調の語根より來れる動詞にして其動作の結果の主體以外に及ぶ時は之を他動調 (sakammaka-kriyā) と云ひ其動作の結果の主體のみに限らるる場合には之を自動調 (akammaka-kriyā) と云ふ。受動調とは主體が他の人又は物の動作の結果を被るべきを示す調なり。状況調とは動詞によりて其動作の主體の状況を言ひ表はす調にして此場合に於ける動詞は常に自動調のものなるべく而して主體は常に具格の形を取るものなり。

他動調 sūdo odanam pacati 厨司飯を炊ぐ。

so gāman gacchati 彼れ村に往く。

自動調 so sayati 彼は臥せり。

so sādhu bhavati 彼は善き人なり。

受動詞 odano sūdena paccate 飯厨司に由りて炊がる。

状況調 gehe devadattena bhūyate 提婆達多に由りて家に居らる
(提婆達多は家に在りの意 impersonal construction).

sakkate tayā 汝によりて能くせらる(汝は能くすの意)。

§ 127. 言に二種あり爲他言 (parassapadam) 及び爲自言 (attanopadam) 是れなり。巴利語にありては梵語と異なり凡ての動詞は爲他言爲自言何れによりても變化することを得。

§ 128. 法に四種あり。直說法 (Indicative), 命令法 (Imperative, pañcamī), 希求法 (Optative, sattamī), 條件法 (Conditional, kālātipatti) 是れなり。直說法には現在 (Present, vattamānā), 第一過去 (Imperfect, hiyattani), 第二過去 (Perfect, parokkhā), 第三過去 (Aorist, ajjatanī) 及び未來 (Future, bhavissanti) の五種あり。從來の語典學者は動詞の時と法とを區別せず。凡て之を總括して動詞的變化 (ākhyātavibhatti) と稱したり。

§ 129. 動詞の語根より能動調の現在語基を作るに七種の異なる方法あり。是れよりして巴利語の動詞を七種に區別す。

	語根	接尾音	現在第三人稱單數
1.	bhū	a	bhavati
2.	rudh	in...a	rundhati
3.	div	ya	dibbati
4.	su	nu	sunoti
5.	kī	nā	kināti
6.	tan	o	tanoti
7.	cur	e, aya	coreti, corayati

§ 130. 第一種動詞に四類あり。

(1) 語根父音に終り語基を形造る爲めに a の接尾音を加ふべきもの。

語 根	語基	現在第三人稱單數
pac (炊く)	paca	pacati
labh (得)	labha	labhati
jiv (生く)	jiva	jivati

§ 131. 此類の動詞にして語根の父音の前なる母音 i 又は u にして語基を作る時重音變化 (vuddhi) を爲すものと然らざるものとあり。

§ 132. 語根若しくは語基の變化に際し a; i î; u û 等の平音は時として重音半母音變化を爲すことあり。今此等三種の音の關係を示す時は

平音	a	i î	u û
重音	â	ē	ō
半母音	...	ay	av

第一類動詞にして重音變化を爲さざるもの。

tud (害ふ)	tuda	tudati
likh (書く)	likha	likhati
phus (觸る)	phusa	phusati

重音變化を爲すもの。

gup (守る)	gopa	gopati
subh (美しく見ゆ)	sobha	sobhati

§ 133. (2) 第二類の動詞は a の接尾音を要せず、語尾を直接語根の後に附加して語基を作り得べきものなり。

yā (行く) ●	yā	yāti
vā (吹く)	vā	vāti
thā (立つ)	thā	thāti

§ 134. i î; u û 等の母音に終る語根にして語基を形作る場合に單に重音變化を爲し第三類の動詞の如く重音變化の上更に半母音變化を爲さざるものあり。

si (臥す)	se	seti
nî (導く)	ne	neti
hû (在り)	ho	hoti
ku (音す)	ko	koti

§ 135. (3) i î, u û 等の母音に終る語根にして語基を構成する場合に一旦重音變化を爲し更に半母音變化を爲すものあり。是れ第一種第三類動詞なり (§132)。

nî (導く) + a = ne + a = nay + a = naya	nayati
bhû (在り) + a = bho + a = bhav + a = bhava	bhavati

§ 136. (4) 第四類の動詞は語根の第一父音と其次に來る母音とを重ねて語基を形作るものなり。斯の如くして重ねられたる音を名けて疊音 (abbhâso) と云ふ。

[備考一] 含氣音の疊音は同種類の無氣音なり (§§ 5, 6, 7)。

dhâ (保つ)	dadhâ	dadhâti
----------	-------	---------

[備考二] 喉音の疊音は之に相應する顎音にして h の疊音は j なり。即ち k 及び kh の疊音は c にして g 及び gh の疊音は j なり。

hû (供犠す)	juho (§ 132)	juhōti
gam (往く)	jagama (§ 159)	

[備考三] 語根の第一母音若し長音なる時は疊音にありては之を短音に變ずべし。

dâ (與ふ)	dadâ	dadâti
hâ (棄つ)	jahâ	jahâti

§ 137. 第二種動詞は語根の最後の父音の前に空點を加へ後に a を加へて語基を造るものなり。

rudh (沮む) + m...a = ru + m + dh + a = rundha (§ 34).	
bhuj (食ふ) + m...a = bhu + m + j + a + bhuñja (§ 34).	
bhid (破る) + m...a = bhi + m + d + a = bhinda (§ 34).	

chid (切る)	chinda
muc (釋く)	muñca
yuj (専心なり)	yuñja

§ 138. 第三種動詞は ya なる接尾音を取る。

div (戯る) + ya = divya = dibba (§ 52).
yudh (戦ふ) + ya = yudhya = yujjha (§ 52).
man (知る) + ya = manya = mañña (§ 52).
gā (歌ふ) + ya = gāya
jhā (思ふ) + ya = jhāya

此種の動詞にして其語根 ā に終るものは時として e に終る第一種の動詞として取扱はるゝことあり。此變化に於て半母音 ay の a は長音となる。

ge + a = gay + a = gāya
jhe + a = jhay + a = jhāya

§ 139. 第四種動詞は語根の母音に終る場合には nu 若しくは nā を加へ語根の父音に終る場合には unu 又は unā を加へて現在語基を形作るものなり。

[備考] 接尾音 nu 及び unu の u は重音變化によりて o となる (§ 132)。

su (聞く) + nā	sunā	sunāti
su + nu	sunō	sunoti
pa + āp (達す) + unā	pāpunā (§ 10)	pāpunāti
pa + āp + unu	pāpuno	pāpunoti

§ 140. 第五種動詞は語根の後に nā を加へて現在語基を作るものなり。語根若し長音に終る時は先づ之を短音に變ず。

kī (買ふ) (梵: kṛī) + nā	kinā	kināti
ci (積む) + nā	cinā	cināti
lu (刈る) + nā	lunā	lunāti

as (食ふ) + nā	asnā	asnāti
--------------	------	--------

§ 141. 第六種動詞は語根の後に u を加へて語基を作るものなり。u は重音變化によりて o となる。

kar (爲す) + u	karo	karoti
tan (擴く) + u	tano	tanoti
kun (音す) + u	kuno	kunoti

§ 142. 第七種動詞は語根に e 又は aya を加へて語基を作るものなり。語根單父音に終り u 若し其前に來る時は u は重音變化に隨ひ o となる。

cur (盗む) + e 又は aya	core, coraya	coreti, corayati
gup (守る) + e 又は aya	gope, gopaya	gopeti, gopayati
bandh (縛る) + e 又は aya	bandhe, bandhaya	bandheti bandhayati
cint (思ふ) + e 又は aya	cinte, cintaya	cinteti, cintayati

§ 143. 同一語根にして二種若しくは三種の異なる方法により語基を作り得べきもの少からず。其方法の異なるに隨ひ意義を異にする場合あり。今其一二の例を舉ぐれば

pad (1) 定立す	pad + a	padati
pad (7) 行く	pad + e 又は aya	padeti, padayati
pad (3) 行く	pad + ya	pajjati (§ 52)
subh (1) 美しく見ゆ	subh + a	sobhati
subh (2) 打つ	subh + m...a	sumbhati
muc (2) 解く	muc + m...a	muñcati
muc (3) 解く	muc + ya	muccati (§ 52)

144. 或動詞は不規則なる方法によりて現在語基を作る。今其主要なる例を舉ぐれば

gam (1) 行く	gaccha, ghamma	gacchati, ghammati
is (1) 願ふ	iccha	icchati
ās (1) 止まる	accha	acchati

mar (1) 死す	mara, miyya	marati, miyyati
sad (1) 止まる	ni + sîda (坐す)	nisîdati
dis (1) 見る	pass, dakkha	passati, dakkhati
jar (1) 老ゆ	jîra, jiyya	jîrati, jiyyati

第二章 能動調動詞の變化

§ 145. 直說法現在時 Indicative Present に於ける動詞の語尾。

	爲他言(他)		爲自言(自)	
	單數	複數	單數	複數
第一人稱 (I)	mi	ma	e	mhe
第二人稱 (II)	si	tha	se	vhe
第三人稱 (III)	ti	anti	te	ante

§ 146. pac (炊く) の變化。 pac + a

	他		自	
	單	複	單	複
I	pacâmi	pacâma	pace	pacâmhe
II	pacasi	pacatha	pacase	pacavhe
III	pacati	pacanti	pacate	pacante

接尾音 a は m 又は h を以て始むる語尾の前には長音となり。

a, e 等母音を以て始むる語尾の前には消滅す。pac + a + e = pace.

§ 147. gup (守る) gup + a = gopa (§ 132) yâ (行く)

	他		他	
	單	複	單	複
I	gopâmi	gopâma	yâmi	yâma
II	gopasi	gopatha	yâsi	yâtha
III	gopati	gopanti	yâti	yanti

§ 148. si (臥す) si = se (§ 134), saya (§ 135) as (在る)

	他		他	
	單	複	單	複
I	semi, sayâmi	sema, sayâma	asmi, amhi	asma, amha
II	sesi, sayasi	setha, sayatha	asi	attha
III	seti, sayati	senti, sayanti	atthi	santi

§ 149. rudh (沮む) rundha (§137) div (戯る) dibba (§138)

I	rundhâmi	rundhâma	dibbâmi	dibbâma
II	rundhasi	rundhatha	dibbasi	dibbatha
III	rundhati	rundhanti	dibbati	dibbanti

§ 150. su (聞く) suno, sunâ (§139)

	他	
	單	複
I	sunomi, sunâmi	sunoma, sunâma
II	sunosi, sunâsi	sunotha, sunâtha
III	sunoti, sunâti	sunhanti

§ 151. kar (爲す) karo (§141)

	爲 他	
	單	複
I	karomi, kummi	karoma
II	karosi	karotha
III	karoti, kayirati	karonti, kubbanti, kayiranti

	爲 自	
	單	複
I	kubbe	kurumhe, kubbâmhe
II	kuruse, kubbase	kuruvhe, kubbâvhe
III	kurute, kubbati	kubbante

§ 152. cur (儉む) core, coraya (§ 142)

他

單

複

I	coremi, corayâmi	corema, corayâma
II	coresi, corayasi	coretha, corayatha
III	coreti, corayati	corenti, corayanti

§ 153. 命令法 Imperative の語尾.

他

自

單

複

單

複

I	mi	ma	e	âmase
II	—, hi	tha	ssu	vho
III	tu	antu	tañ	antañ

§ 154. pac (炊く)

I	pacâmi	pacâma	pace	pacâmase
II	paca, pacâhi	pacatha	pacassu	pacavho
III	pacatu	pacantu	pacatañ	pacantañ

as (在り)

hû (在り)

他

他

單

複

單

複

I	asmi	asma	homi	homa
II	âhi	attha	hohi	hotha
III	atthu	santu	hotu	hontu

su (聞く)

他

單

複

I	sunomi, sunâmi	sunoma, sunâma
II	sunohi, sunâhi, suna	sunotha, sunâtha
III	sunotu, sunâtu	sunantu

自

單

複

I	sunē	sunâmase
II	sunassu	sunavho
III	sunatañ	sunantañ

kar (爲す)

他

自

單

複

單

複

I	karomi	karoma	kubhe	kubbâmase
II	karohi, kuru	karotha	{kurussu, kurassu	kuruvho
III	karotu, kurutu	karontu, kubbantu	kurutañ	kubbantañ

§ 155. 希求法 Optative の語尾.

他

自

單

複

單

複

I	eyyâmi	eyyâma	eyyañ	eyyâmhe
II	eyyâsi	eyyâtha	etho	eyyavho
III	eyya	eyyañ	etha	erañ

希求法の爲他言單數にては凡ての人稱を通じ e の語尾を有する形あり。

§ 156. pac (炊く)

他

自

單

複

單

複

I	pace, paceyyâmi	paceyyâma	paceyyañ	paceyyâmhe
II	pace, paceyyâsi	paceyyâtha	pacetho	paceyyavho
III	pace, paceyya	paceyyañ	pacetha	pacerañ

as (在り)		brû (言ふ)	
他		他	
單	複	單	複
I assam	assâma	bruveyyâmi	bruveyyâma
II assa	assatha	bruveyyâsi	bruveyyâtha
III siyâ, assa	siyum, assu	bruve, bruveyya	bruveyyum
kar (爲す)			
他		他	
單	複	單	複
I kareyyâmi, kayirâmi		kareyyâma, kayirâma	
II kareyyâsi, kayirâsi		kareyyâtha, kayirâtha	
III {kare, kareyya, kubbe, kubbeyya, kayirâ		kareyyum, kayirum	
自		自	
I kubbe, kare, kareyyum		kubbeyyâmhe, kareyyâmhe	
II kubbetho		kubbeyyavho	
III kayirâtha, kubbetha, krabbetha		kubberam	

§ 157. 第一過去 Imperfect の語尾.

他		自	
單	複	單	複
I a, am	mhâ	im	mhase
II o	ttha	se	vham
III â	û	ttha	tthum

第一過去, 第三過去, 及び條件法の動詞を構成するには語根の前に a を添加すべし。

§ 158. bhû (在り) a + bhû + a = a + bho + a = a + bhav + a = abhava.
(§§ 129, 135).

他		自	
單	複	單	複
I abhava, abhavam	abhavamhâ	abhavim	abhavâmhase
II abhavo	athavattha	abhavase	abhavavham
III abhavâ	abhavû	abhavattha	abhavatthum
pac (炊く)			
I apaca, apacam	apacamhâ	apacim	apacâmhase
II apaco	apacattha	apacase	apacavham
III apacâ	apacû	apacattha	apacatthum
hû (在り)			
I ahûvam	ahûvamha	ahuvim	ahuvâmhase
II ahuvo	ahuvattha	ahuvase	ahuvavham
III ahuvâ	ahuvû, ahuvu	ahuvattha	ahuvatthum
kar (爲す)			
I akam, akaram	akamha, akaramhâ	akarim	akarâmhase
II akaro	akattha, akarottha		
III akâ, akarâ	akaru	akarattha	

brû (言ふ) abruvâ, abruvu (III 單複)

dâ (施す) adadâ, adadu 等

§ 159. 第二過去 Perfect の語尾.

他		自	
單	複	單	複
I a	mha	i	mhe
II e	ttha	ttlo	vho
III a	u	ttha	re

第二過去は語根の第一父音と其次に来る母音とを重ね之に接尾音並に語尾を加へて之を作る。父音に始まる語尾の前には接尾音は i となる。

pac (炊く)

自		他	
單	複	單	複
I papaca	papacimhe	papaci	papacimhe
II papace	papacittha	papacittho	papacivho
III papaca	papacu	papacittha	papacire

bhû (在り) 疊音の母音 û を a となし bh を b とす. (§ 136 備考一)。

I babhûva	babhûvimha	babhûvi	bababhûvimhe
II babhûve	babhûvittha	babhûvittho	bababhûvivho
III babhûva	babhûvu	babhûvittha	babhûvire

gam (行く) jagama, jagamimha (他, I, 單複) (§ 136 備考二)

brû (言ふ) は第二過去の第三人稱單複兩數に於ては âh の形を取る。第二過去に於て此語形の用ひらるゝは次の三種のみなり。

他	
單	複
III âha	âhu, âhamisu

§ 160. 第三過去 Aorist の語尾.

他		自	
單	複	單	複
I im	mhâ	a	mhe
II o	ttha	se	vham
III î	imsu, um	â	û

bhû (在り) a + bhû + im (§ 157), bhû + im

他	
單	複
I abhaviṃ, bhaviṃ	{abhaviṃhâ, bhaviṃhâ, abhaviṃha, bhaviṃha}

他		複	
單	複	單	複
II abhavi, bhavi, abhavo, bhavo	abhavittha, bhavittha		
III abhavi, abhavî, bhavi	{abhaviṃsu, bhaviṃsu, abhavum, bhavum}		
自		他	
單	複	單	複
I abhavam, abhava	abhavimhe		
II abhavise	abhavivham		
III abhavittha, bhavittha, abhavâ, bhavâ	abhavû		
vac (語る)		hû (在り)	
他		複	
單	複	單	複
I avocim	avocumbâ	ahosiṃ, ahum	ahosimha, ahumha
II avaco	avocuttha	ahosi	ahosittha
III avoca	avocum	ahû, ahosi	ahesum, ahavum
as (在り)		dâ (施す)	
I âsim	âsimhi	adâsim	adâsimha, adumha
II âsi	âsittha	adâsi, ado	adittha
III âsi	âsiṃsu, âsum	{adadi, adajjî, adâsi, adâ	adadiṃsu, adadum adajjimsu, adaṃsu
su (聞く)		複	
單		複	
I asuṇim, suṇim, assosiṃ	{asuṇimha, suṇimha, assosiṃha, assumha}		
II assosi	assosittha		
III asuṇi, suṇi, assosi	asuṇimsu, suṇimsu, assosiṃsu		
kar (爲す)		複	
I akâsim, akariṃ, kariṃ	akâsimha, akariṃha, kariṃha		
II akâ, akari	akâsittha, akariththa		
III akâsi, akari, kari	{akâsum, akariṃsu, kariṃsu, akaṃsu, akarum}		

§ 161. 最も廣く用ひらるゝ諸動詞の第三過去爲他言第三人稱單數形二個以上を有するものを擧ぐれば

is (1) 願ふ icchi, esi

labh (1) 得 alattha, alabhi, labhi—alattham, labhim (I 單)

â+kus (1) 罵る akkocchi, akkosi

dis (1) 見る addasâ, adakkhi, addakkhi, dakkhi, passî, apassî

pa+vis (1) に入る pâvisi, pâvekkhî—pâvisimsu (III 複)

han (1) 殺す ahani, hani, avadhî

chid (2) 切る chindi, acchindi, chijjî

u+pad (3) 生ず udapâdi, uppajjî

jan (3) 生る jâyi, ajanî

sak (4) 能くす asakkhi, sakkhi, sakkunî

gah (5) 執る aggahi, aggahesi, agañhi, gañhi

cint (7) 思ふ acintesi, cintesi, acintayi, cintayi

§ 162. 未來動詞 Future の語尾.

他		自	
單	複	單	複
I ssâmi	ssâma	ssam	ssâmhe
II ssasi	ssatha	ssase	ssavhe
III ssati	ssanti	ssate	ssante

未來及び條件法に於ては語根と語尾との間に i を添加し接尾音 a を省除す。

pac (炊く)

I	pacissâmi	pacissâma	pacissam	pacissâmhe
II	pacissasi	pacissatha	pacissase	pacissavhe
III	pacissati	pacissanti	pacissate	pacissante

§ 163. labh (得) 及び vas (住む) の未來語基に lacch, vacch の變形あり。

他

單

複

I	labhissâmi, lacchâmi	labhissâma, lacchâma
II	labhissasi, lacchasi	labhissatha, lacchatha
III	labhissati, lacchati	labhissanti, lacchanti

§ 164. vac (語る) の未來語基は vakkha なり vakkhati

dis (見る) の未來時第三人稱單數には passissati, dakkhiti, dakkhissati 等の形あり。

hû (在り) hehiti, behissati hohiti, hohissati, heti, hessati

si (臥す) sayissati, sessati

han (殺す) hanissati, vadhissati

gah (執る) gañhissati, gañhessati, gahessati

kar (爲す) にも亦數種の異なる形あり。

他

I	kâhâmi, karissâmi	kâhâma, karissâma
II	kâhasi, kâhisi, karissasi	kâhatha, karissatha
III	kâhati, kâhiti, karissati	kâhanti, kâhinti, karissanti

自

I	karissam	karissâmhe
II	karissase	karissavhe
III	karissate	karissante

§ 165. 條件法 (Conditional) の語尾.

他		自	
單	複	單	複
I ssam	ssamhâ	ssam	ssâmhase
II sse	ssatha	ssase	ssavhe
III ssâ	ssamsu	ssatha	ssimsu

條件法の動詞を構成するに時としては語根の前に a を添加することあり (§ 157). 語根と語尾との間に i を添加し接尾音の母

音を省除すること前に述べたる所の如し (§ 162)。

pac (炊く)

他

單

複

I	apacissam, pacissam	{ apacissamha, pacissamha apacissamhâ, pacissamhâ
II	apacisse, pacisse	apacissatha, pacissatha
III	apacissâ, pacissâ	apacissamsu, pacissamsu
自		
I	apacissim	apacissâmhase
II	apacissase	apacissavhe
III	apacissatha	apacissimsu

§ 166. 條件法とは全く事實に反せる假定及び此假定に基ける結果を言ひ表はすに用ひらるゝものなり。

sace ayyo me pañcasîlâni adassâ upari devaloke nibbatto abhavissam 尊者若し我に五戒を授けたりせば上天上界に生じたらんに。

sace so paṭhamavaye pabbajjam alabhissâ arahâ abhavissâ 彼若し壯年にして出家を得たりせば阿羅漢たりしならんに。

第三章 受動調及び状況調動詞の變化

§ 167. 受動調動詞現在語基は語根に ya を加へて之を作る。

nî (導く) + ya = nîya (導かる)。

gam (行く) + ya = gamya = gamma (行かる) (§52)。

斯くの如くして作りたる現在語基に爲自言若しくは爲他言の人稱語尾を附加したるものは受動調の現在語形なり。

爲自(他) so nîyate (nîyati) te nîyante (nîyanti)

爲自(他) gâmo gammate (gammati)

凡て動詞は能動調に於ては爲他言の語尾を取ること多く受動調に於ては爲自言の語尾を取ること多し。

§ 168. 語根に ya を附加するに種々の異なる方法あり。

(i) 語根若し â 又は i に終る時は母音は î に變じ u に終る時は û に變ず。

dâ (施す)	dîya (施さる)
pâ (飲む)	pîya (飲まる)
jî (勝つ)	jîya (勝たる)
ku (歌ふ)	kûya (歌はる)
su (聞く)	sûya (聞かる)

隨て語根若し î 又は û に終る時は ya は直接語根の後に附加せらる。

nî(導く) nîya(導かる), hû(在り) hûya(在らる), lû(刈る) lûya(刈らる)。

(ii) 語根若し複合父音に終る時は ya は i を介して語根に附加せらる。語根の s, h, r 等の父音に終る時も亦同じ。此場合 i は亦 î に變ず。

pucch(問ふ) pucchîya(問はる), has(笑ふ) hasîya(笑はる), sar(追憶す) sarîya(追憶せらる), mah(敬ふ) mahîya(敬はる)。

(iii) 語根若し單父音にて終るときは直に ya を加ふ。此場合父音連聲法により種々の變化あり。

labh (得) labbha (得らる) (§52)	pac (炊く) pacca (炊がる) (§52)
khâd (食ふ) khajja (食はる) (§52)	gam (行く) gamma (行かる)
is (願ふ) icchîya (願はる)	vah (運ぶ) vuyha (運ばる) (§55)
vas (住む) vussa (住まはる)	yaj (供犠す) ijja (供犠せらる)
lup (切る) lupya (切らる)	

§ 169. 同一語根にして種々の異なる受動調語基を作り得べきものあり。

kar (爲す) kariya, kariyya, kayira, kayya

gam (行く) gamiya, gacchiya, ganya, gamma

gah (取る) gayha, gheppa

hā (棄つ) hāya, hīya

§ 170. 受動調動詞の活用例. pac (炊ぐ) 語基 pac + ya = pacca
現在 paccate odano Devadattena 飯調達の爲めに炊がる。

	爲自		爲他	
	單	複	單	複
I	pacce	paccāmhe	paccāmi	paccāma
II	paccase	paccavhe	paccasi	paccatha
III	paccato	paccanto	paccati	paccanti

命令法

(自) pacce, paccāmase; paccassu, paccavho; paccatān, paccamtān.

(他) paccāmi, paccāma; pacca paccāhi, paccatha; paccatu, paccantu.

希求法

(自) pacceyyān, pacceyyāmhe; paccetho, pacceyyavho; paccetha, pacceran.

(他) pacceyyāmi, pacceyyāma; pacceyyāsi, pacceyyātha; pacce pacceyya, pacceyyum.

第一過去

(自) apaccin, apaccimhase; apaccase, apaccavham; apaccattha, apaccatthum.

(他) apacca, apaccamhā; apacco, apaccattha; apaccā, apaccu.

第二過去

(自) papacci, papaccimhe; papaccittho, papaccivho; papaccittha, papaccire.

(他) papacca, papaccimha; papacce, papaccittha; papacca, papaccu.

第三過去

(自) apacca, apaccimhe; apaccise, apaccivham; apaccā, apaccū.

(他) apaccin, apaccimhā; apacco, apaccittha; apacci, apaccimsu apaccum.

未來

(自) paccissān, paccissāmhe; paccissase, paccissavhe; paccissate, paccissante.

(他) paccissāmi, paccissāma; paccissasi, paccissatha; paccissati, paccissanti.

條件法

(自) apaccissān, apaccissāmhase; apaccissase, apaccissavhe; apaccissatha, apaccissimsu.

(他) apaccissān, apaccissamhā; apaccisse, apaccissatha; apaccissā, apaccissimsu.

§ 171. 狀況調の動詞の語根は凡て自動調のものなるか若しくは他動調の動詞の體格の主體なく(主體は常に具格の形を取る)用格の目的物なく全く獨立的に用ひらるゝ場合のみにして形は唯第三人稱の單數のみに限る。

ni + sad (坐す) nisajjate tena (彼によりて坐せらる。彼坐すの意).
gehe Devadattena paccate (提婆達多家にありて炊ぐの意).

§ 172. 狀況調の動詞を構成するには受動調動詞構成の場合に於け

ると等しく語根に *ya* を加へ之に各法若しくは時の爲自言第三人稱單數の語尾を加ふべし。

	<i>bhû</i> (在り)	<i>hû</i> (在り)	<i>si</i> (臥す)
現在	<i>bhûyate</i>	<i>hûyate</i>	<i>sîyate</i>
命令	<i>bhûyatam</i>	<i>hûyatam</i>	<i>sîyatam</i>
希求	<i>bhûyetha</i>	<i>hûyetha</i>	<i>sîyetha</i>
一過	<i>anubhûyattha</i> (<i>anu</i> + <i>bhû</i>)	<i>ahuyattha</i>	<i>sîyittha</i>
二過	<i>babhûvîyittha</i> , <i>babhûvittha</i>		
三過	<i>abhavittha</i> , <i>abhûvittha</i>	<i>abhavittha</i>	
未來	<i>bhavissate</i> , <i>bhûyissate</i>	<i>hûyissate</i>	<i>sayissate</i>
條件	<i>abhavissatha</i>		

第四章 他の動詞相

§ 173. 催起相 Causative 催起相動詞の語基は語根に *e*, *aya*; *âpe*, *âpaya* 等の接尾音を附加して之を作る。催起動詞の語基を形作る上に於て注意すべき二三の事項あり。

(i) 語根若し *i*, *î* 又は *u*, *û* に終る時は是等は先づ半母音變化を爲し、半母音の *a* は時として長音となる。

si (臥す) *sâye*, *sâyaya* 或 *sayâpe*, *sayâpaya* (臥さす)

(ii) 語根 *u* 又は *û* に終る時は接尾音は *e* 并に *aya* なり。

bhû + *e* = *bho* + *e* = *bhâv* + *e* = *bhâve*, *bhâvaya* (修増す)

su + *e* = *so* + *e* = *sâv* + *e* = *sâve*, *sâvaya* (聞かす)

(iii) 語根若し長母音 *â* に終る時は接尾音は *âpe*, *âpaya* なり。

dâ + *âpe* = *dâpe*, *dâpaya* (與へしむ)

thâ + *âpe* = *thape*, *thapaya* (立たしむ) (語根の *â* は *a* となる)

ñâ + *âpe* = *ñâpe*, *ñâpaya* (知らしむ)

(iv) 語根單父音に終り短母音若し其前に來る時は此等は多くの場合に於て重音變化を爲す (§132)。

chid + *e* = *chede*, *chedaya*; *chedâpe*, *chedâpaya* (切らしむ)

mar + *e* = *mâre*, *mâraya*; *mârâpe*, *mârâpaya* (殺さしむ)

pac + *e* = *pâce*, *pâcaya*; *pâcâpe*, *pâcâpaya* (炊がしむ)

tud + *e* = *tode*, *todaya*; *todâpe*, *todâpaya* (害はしむ)

然れども次の如き例あるに注意すべし。

gam + *e* = *game*, *gamaya* (行かしむ)

ghaṭ + *e* = *ghate*, *ghaṭaya* (努力せしむ・合併せしむ)

(v) 語根若し複合父音に終る時は其前なる母音は重音變化をなすことなし、而して接尾音は *âpe*, *âpaya* なり。

cint + *âpe* = *cintâpe*, *cintâpaya* (考へしむ)

pucch + *âpe* = *pucchâpe*, *pucchâpaya* (問はしむ)

§ 174. 自動調の語根より作られたる催起動詞は一個の用格を支配す。

si (臥す) *bhikkhum* *sayâpeti* 比丘を臥さす。

§ 175. 一個の用格を支配する他動調の語根は催起相の動詞としては二個の用格を支配し二個の用格を支配するものは三箇の用格を支配す。

gam (行く) *purisam* *gâman* *gamayati* 人を村に行かしむ。

pac (炊く) *Devadattam* *odanam* *pâceti* 提婆達多をして飯を炊がしむ。

yâc (乞ふ) *Yaññadattam* *kambalam* *yâcâpeti* *brâhmaṇam* *Devadatto* 提婆達多、演若達多をして婆羅門に毛衣を乞はしむ。

§ 176. 重複相 Frequentative 行爲の反覆を表はし若しくは動詞の意義を強くせんが爲め語を重複して作りたる動詞を重複相と云

ふ。重複相動詞の構成に關して注意すべき規則は略上に述べたる所の如し (§§ 173, 174, 175)。

lap (語る・悲しむ) lālapati, lālapati (悲しむ)

kam (行く) caṅkamati (經行す)

gam (行く) jaṅgamati (徘徊す)

cal (動く) cañcalati (震動す)

jal (輝く) daddallati (光り輝く)

§ 177. 希求相 Desiderative とは單動詞によりて言表はさるゝ動作をなさんと希求する意義を表はす動詞にして語根の第一父音及び其次に来る母音を重ねて之を作る今其主なるものを擧ぐれば下の如し。

su (聞く) sussûsati (聞かんと欲す・傾聽す)

bhuj (食ふ) bubhukkhati (食はんと欲す・飢ゆ)

tij (堪ふ) titikkhati (堪ふ)

ghas (食ふ) jighacchati (食はんと欲す・飢ゆ)

pâ (飲む) pivâsati (飲まんと欲す・渴す)

§ 178. 擬名詞相 Denominative とは名詞の語基に接尾音及び語尾を附加して之を作る。「……の如く振舞ふ、……の如く取扱ふ、己れの……を得んと望む、……を爲す」等の意あり。擬名詞相の接尾音の主なるものは âya, îya, aya 等なり。

pabbato (山) pabbatâyati (山の如く振舞ふ)

samuddo (海) samuddâyati (海の如く振舞ふ)

putto (兒) puttîyati (兒の如く取扱ふ)

chattam (傘) chattîyati (傘の如く取扱ふ)

civaram (法衣) civarîyati (己れの法衣を得んと望む)

dalho (堅固なる) dalhayati (固くなす・固くす)

pamāṇam (量) pamāṇayati (量をなす・量る)

第五章 分詞・連續體・不定體

§ 179. 分詞には現在未來過去三時の能動受動分詞と義務分詞と凡て七種の異なる形あり。

§ 180. 分詞は其性、動詞的形容詞なれば性數格に於て常に其が形容する名詞と一致せざるべからず。

§ 181. 現在能動分詞 Present Participle Active は語根の現在語基に (1) m, nta 又は (2) māna を加へて之を作る。

語根	語基	現在能動分詞語基
gam (行く)	gaccha	gaccham, gacchanta, gacchamāna
mah (敬ふ)	maha	maham, mahanta, mahamāna
pac (炊く)	paca	pacam, pacanta, pacamāna
chid (切る)	chinda	chindam, chindanta, chindamāna
bhuj (食ふ)	bhuñja	bhuñjam, bhuñjanta, bhuñjamāna
div (戯る)	dibba	dibbam, dibbanta, dibbamāna

§ 182. 現在語基を作るに際し語根を重ねるものは分詞を作る場合に於ても亦然かす。

thā (立つ)	tiṭṭha	tiṭṭham, tiṭṭhamāna
pâ (飲む)	piba	pibam, pibamāna
hu (供犠す)	juha, jaha	juhām, juhamāna, jahām, jahamāna
dā (施す)	dadā	dadam, dadamāna, denta

§ 183. 現在分詞を作るに稍々不規則なる方法によるものあり。

as (在り)	santa, samāna
kar (爲す)	{ kubbam, kubbanta, karonta, kurumāna, kubbāna
pa + hū (在り)	pahonta, pahuyamāna
jan (生ず)	jāyam, jāyamāna, jāññamāna

§ 184. 第七種動詞の現在能動分詞.

語根	語基	現在能動分詞語基
cur (盗む)	core, coraya	corenta, corayam, corayamâna
pâl (護る)	pâle, pâlaya	pâlenta, pâlayam, pâlayamâna

§ 185. 催起動詞の現在分詞構成には催起動詞の現在形及び現在分詞構成に關する規則を適用すれば可なり (§§ 173, 181)

語根	催起動詞現在語基	現在分詞
bhû	bhâve, bhāvaya	bhâventa, bhāvayanta,
(在り)	(増修す)	bhāvayamâna (増修する)
kar	kâre, kâraya	kârenta, kârayanta,
(爲す)	(爲さしむ)	kârayamâna (爲さしむる)
	kârâpe, kârâpaya	kârâpenta, kârâpayanta,
	(„)	kârâpayamâna („)

斯くして作りたる分詞は其が形容する名詞の性數格に隨ひ其變化を異にす. 即ち第一種形は男性及び中性にありては其變化 gacchanta に準ず.

(男) pacam, pacanto puriso (炊ぐ人)
單 複

體	pacam, pacanto puriso	pacanto, pacantâ purisâ
呼	paca, pacam, pacâ purisa	pacanto, pacantâ purisâ
用	pacantam purisam	pacante purise

(中) maham cittam (敬ふ心)

體	maham cittam	mahantâ, mahantâni cittâni
呼	maham, maha, mahâ, citta	mahantâ, mahantâni cittâni
用	mahantam cittam	mahante, mahantâni cittâni

§ 186. 第一種現在動詞語基の語尾に ti 又は uti を加へ女性分詞の語基を作る. 女性分詞の變化は nadî に準ず.

(女體單) pacatî, pacantî; dissatî, dissantî; coretî corayati, corentî corayantî (§ 93, 4).

§ 187. 第二種現在分詞は其變化男性にては purisa に, 中性にては citta, 女性にては kaññâ に等し.

(男) caramâno, caramânâ; (中) caramânam, caramânâ caramânâni; (女) caramânâ, caramânâyo.

§ 188. 現在受動分詞 Present Participle Passive は動詞の現在語基に mâna を附加して之を作る. 其中間に ya 又は iya を挿入すべきこと現在受動動詞を作る場合に同じ.

語根	受動動詞現在語基	受動分詞
car (往く)	carîya	carîyamâna (往かるゝ)
labh (得)	labbha (§ 52)	labbhamâna (得らるゝ)
vah (運ぶ)	vuyha (§§ 55, 168)	vuyhamâna (運ばるゝ)
tud (打つ)	tujja (§ 52)	tujjamâna (打たるゝ)
kar (爲す)	kayira, karîya	kayiramâna, karîyamâna
cur (盗む)	corîya	corîyamâna
pâl (護る)	pâlîya	pâlîyamâna

§ 189. 未來分詞の能動形 Future Participle Active は現在語基に issam, nta, mâna, âna 等の語尾を附加して之を作る.

kar (爲す)	karissam, karonta, karamâna, kuramâna, karâna
bhuj (食ふ)	bhuñjissam, bhuñjanta, bhuñjamâna, bhuñjâna
bhikkh (乞ふ)	bhikkhissam, bhikkhanta, bhikkhamâna, bhikkhâna

斯くの如くして作られたる未來分詞は現在分詞の場合に於けると等しく其が形容する名詞の性, 數, 格を逐ふて變化す.

(男) karissam puggalo (爲さんとする人); karissantâ puggalâ.
(中) carissam rūpam (動んとする形); carissantâ carissantâni rūpâni.
(女) bhuñjissatî kaññâ (食はんとする女); bhuñjissatiyo kaññâyo.

§ 190. 過去受動分詞 Past Participle Passive は凡ての分詞中最も重要なものにして之を形作るに最も廣く用ひらるゝ語尾は ta 及び na なり。是等の語尾を附加するに種々の異なる方法あり。

§ 191. ta 語尾。

(i) 語根若し母音に終る時は語尾を直接語根に附加して之を作る。

語根	現在第三人稱單數	過去受動分詞
nahā (浴す)	nahāyati	nahāta (浴せられたる)
bhū (有る)	bhavati	bhūta (存在せられたる)
ji (勝つ)	jayati	jita (勝たれたる)
nī (導く)	nayati	nīta (導かれたる)
bhī (恐る)	bhāyati	bhīta (驚かされたる)
ñā (知る)	jānāti	ñāta (知られたる)

此部類に屬する過去分詞にして之を構成するに不規則なる方法によるものあり。

pā (飲む)	pibati	pīta (飲まれたる)
thā (立つ)	tiṭṭhati	thīta (立たれたる)
dhā (保つ)	dadhāti	hīta (保たれたる。有利なる)

(ii) 語根若し父音に終る時は i を介して ta 語尾を附加す。

pac (炊く)	pacati	pacita (炊かれたる)
gah (執ふ)	gaṇhāti	gahita (執へられたる)
kapp (用意す)	kappati	kappita (用意せられたる)
khād (食ふ)	khādati	khādita (食はれたる)
kath (語る)	katheti, kathayati	kathita (語られたる)
maṇḍ (飾る)	maṇḍeti, maṇḍayati	maṇḍita (飾られたる)

[備考一] 斯の如くして形作られたる分詞の變化は男性にては purisa, 中性にては citta, 女性にては kaññā に準ず。

(男) buddhena bhāsito dhammo (佛によりて説かれたる法)。

(中) bhāsitaṃ suttaṃ (説かれたる經)。

(女) bhāsitā gāthā (説かれたる。唱へられたる偈)。

[備考二] 過去受動分詞の中性形は時として名詞として用ひらるゝことあり。

語根	分詞	中性形名詞
has (笑ふ)	hasita	hasitaṃ (笑)
car (行く・行ふ)	carita	caritaṃ (行・所行)
jīv (生く)	jīvita	jīvitaṃ (命)
gajj (轟く)	gajjita	gajjitaṃ (雷)

(iii) 第三の場合に於ては語尾は語根に同化し或は語根を同化する。

bhuj (食ふ) bhuj + ta = bhutta (§ 47)

yuj (意を專注す) yuj + ta = yutta (§ 47)

muc (脱る) muc + ta = mutta (§ 47)

is (願ふ) is + ta = iṭṭha (§ 48)

nas (亡ぶ) nas + ta = naṭṭha (§ 48)

daṃs (咬む) daṃs + ta = daṭṭha (§ 48)

dam (馴らす) dam + ta = danta (§ 34)

kudh (怒る) kudh + ta = kuddha (§ 48)

badh (縛す) badh + ta = baddha (§ 48)

labh (得) labh + ta = laddha (§ 49)

muh (惑ふ) muh + ta = mūḷha (§ 56)

guh (隠す) guh + ta = gūḷha (§ 56)

§ 192. 語根の r 及び n は分詞語尾 ta の前には消滅す。

kar (爲す) + ta = kata man (考ふ) + ta = mata

sar (憶念す) + ta = sata tan (擴く) + ta = tata

語根の m 又時として消滅す。

gam (行く) + ta = gata ram (樂しむ) + ta = rata

§ 193. **na 語尾** 過去分詞の構成上 **na** 語尾を取る語根は多く **d**, **r** 又は母音に終れるものなり。

(i) 語根若し父音に終る時は **ta** 語尾の場合に於けると等しく時として **i** を介して語根語尾を連絡し語尾は語根の最後の父音を同化する。

blid (破る) + na = bhinna tar (渡る) + na = tinna (梵: tīrṇa)

rud (泣く) + na = runna jar (老ゆ) + na = jinna (梵: jīrṇa)

chad (覆ふ) + na = channa kir (撒す) + na = kinna (梵: kīrṇa)

dā (與ふ) + na = dinna pūr (満たす) + na = punna (梵: pūrṇa)

ni + sad (坐す) + na = nisinna.

(ii) 語根若し母音に終る時は **na** は直接語根に附加せらる。

khī (盡く) + na = khīna lī (著く) + na = līna

lū (刈る) + na = lūna hā (棄つ) + na = bīna (棄てられたる。賤しき) (語根の **ā** は **i** となる)

§ 194. 不規則なる過去分詞形の主なるもの。

ge (歌ふ)	gīta	phal (割く)	phulla
si (臥す)	sayita	anu + sās (教ふ)	anusittha
bhañj (破る)	bhagga		

§ 195. 同一語根にして種々の異なる分詞形を有するものあり。

vas (住む) vasita, vusita (usita), vuttha

vam (嘔く) vanta, vamita

phus (觸る) phusita, phuttha

is (願ふ) icchita, ittha, esita

gup (守る) gutta, gopita

lag (著く) lagga, lagita

§ 196. **過去能動分詞 Past Participle Active** は過去受動分詞の語基に **vā** を附加して之を作る其變化は **gunavā** に同じ。

語根	受動分詞	能動分詞
hu (供養す)	huta	hutavā (供養せし)
bhuj (食ふ)	bhutta	bhuttavā (食ひし)
thā (立つ)	thita	thitavā (立ちし)
vas (住む)	vusita	vusitavā (住みし)
ā + ruh (昇る)	ārūḥa	ārūḥavā (昇りし)

§ 197. 過去受動分詞の語基に **vī** を加へて能動形を作ることあり。此場合に於ては **vī** の前なる **a** は長音に變ず。

hu (供養す)	huta	hutāvī (供養せし)
thā (立つ)	thita	thitāvī (立ちし・立てる)
vas (住む)	vusita	vusitāvī (住みし・住める)

§ 198. **義務分詞 Participle of Necessity** 動詞の語根又は語基に直接又は **i** を介して **tabba**, **anīya**, **ya** を加へ義務分詞を作る。母音に終れる或語根又は語基の母音は重音變化を爲す。義務分詞の變化は男性は **purisa**, 中性は **citta**, 女性は **kaññā** に準ず。

語根	義務分詞
gam (行く)	gantabba, gamitabba, gamanīya (行かるべき)
bhar (保つ)	bharitabba, bharanīya (保たるべき)
ci (積む)	cetabba, ceyya (積まるべき)
nī (導く)	netabba, neyya (導かるべき)
pā (飲む)	pātabba, peyya (飲まるべき)

§ 199. **tabba 語尾**.

(i) 語根若し **ā** に終る時は **tabba** は直接之に附加せらる。

hā (棄つ)	hātabba (棄てらるべき)
dā (與ふ)	dātabba (與へらるべき)
mā (量る)	mātabba (量らるべき)
ñā (知る)	ñātabba (知らるべき)

- (ii) 語根若し i, ī に終る時は是等は先づ e に變ず (§ 132).
 i (行く), etabba (行かるべき) ji (勝つ), jetabba (勝たるべき)
 u, ū に終る語根は特別の語基を有す。
 bhū (存在す) bhavitabba (存在せらるべき. あるべき)
 ku (歌ふ) kavītabba (歌はるべき)
 su (聞く) sotabba, sunitabba (聞かるべき)
- (iii) 語根若し父音に終る時は i を介して語根と tabba とを連結す。
 pac (炊く) pacītabba (炊がるべき)
 budh (知る) jujjhītabba (知らるべき)
 pucch (問ふ) pucchītabba (問はるべき)
 pūj (敬ふ) pūjītabba (敬はるべき)
- (iv) 語尾を直接語根に附加し tabba の t を語根の最後の父音に同化せしむる場合あり。
 gam (行く) gantabba (行かるべき) (§ 34)
 labh (得) laddhabba (得らるべき) (§ 49)
 kar (爲す) kattabba (爲さるべき) (§ 53)

§ 200. ya 尾語. 同化の常則によりて ya は概ね語尾の最後の父音に同化す. 此際語根は時として重音變化を爲す。

- bhāj (依る) bhāgyam (依らるべきもの. 命運) (§ 52)
 dam (御す) dammo (御せらるべきもの. 牡犢) (§ 52)
 bhuj (食ふ) bhojjam (食はるべきもの. 噉食) (§§ 132, 52)
 vac (語る) vākyam (語らるべきもの. 言語) (§ 132)
 pad (歩む) pajjo (歩まらるべきもの. 道路) (§ 52)

ya は時として i を介して語根に附加せらる。

- kar (爲す) kārīya (爲さるべき) (§ 132)
 bhār (保つ) bhārīya (保たるべき) (§ 132)

母音に終る語根の後には ya 語尾の y は時として重ねらる。

- | | |
|---------------|---------------|
| hā (棄つ) heyya | ñā (知る) neyya |
| ji (勝つ) jeyya | nī (導く) neyya |
| ci (積む) ceyya | dā (與ふ) deyya |

§ 201. anīya 語尾. 語根又は語基に附加せらる。

- | | | | |
|----------|-----------|------|----------|
| bhū | bhavanīya | ram | ramanīya |
| ās (止まる) | āsānīya | nahā | nahānīya |
| su | savanīya | vad | vadanīya |

§ 202. 同一語根にして tabba, ya, anīya の中二種又は三種の語尾を用ひ義務分詞を作り得べきものあり。

- dā dātabba, deyya su sotabba, sunitabba, savanīya
 bhāj bhajanīya, bhāgya ñā ñātabba, ñeyya, jānītabba, ñātayya
 bhū bhavitabba, bhabba vad vadanīya, vajja
 mā meyya, mātabba, minītabba, metabba.

§ 203. 連續體 Gerund は語根又は語基に直接又は i を介して tvā, tvāna, tūna, ya, cca (=tya) 等の語尾を附加して之を作る。連續體は變化することなし。

- | | |
|-------------|---------------------------------------|
| su (聞く) | sutvā, sutvāna (聞きて) |
| gam (行く) | gantvā, gamītvā, gantūna, gamma (行きて) |
| ava+hā (棄つ) | ohāya, ohīyītvā (棄てゝ) |
| upa+i (行く) | upecca (近きて)=upa+i+tya |

§ 204. tvā, tvāna, tūna 語尾 是等の語尾の中最も廣く用ひらるゝは tvā にして tvāna 及 tūna は韻を調ふる爲め稀れに韻文中に用ひらる。

(i) i を介して語根に附加せらる。

- pac (炊く)+i+tvā=pacītvā (炊きて. 炊きて而して)
 khād (食ふ)+i+tvā=khādītvā (食ふて. 食ふて後)

(ii) i, î に終る語根の母音は概ね重音變化を爲す。

nî (導く) netvâ jî (勝つ) jetvâ

(iii) 語根の最後の父音は時として消滅す。

chid (切る) chetvâ, chitvâ bhuj (食ふ) bhutvâ

kar (爲す) katvâ

(iv) 語根の長母音は短音に變ず。

bhî (懼る) bhitvâ dâ (與ふ) datvâ

pa + âp (得) patvâ, pâpunitvâ (達して)

thâ (立つ) thatvâ ñâ (知る) ñatvâ

§ 205. ya, cca 語尾 は多く前置詞を冠する語根の後に用ひらる。去れど單語根の後に用ひらるゝ場合亦少からず。

abhi + vand abhivandiya; abhivanditvâ (敬禮して)

vand vandiya; vanditvâ (拜して)

vi + bhaj vibhajja, vibhajiya; vibhajitvâ (分別して)

(i) 長母音に終る語根の後には語尾は時として直接語根に附加せらる。

pi + dhâ pidhâya; pidahitvâ (閉ぢて)

vi + ñâ viññâya; vijânitvâ (知つて)

â + dâ âdâya; âdiyitvâ (取りて)

(ii) cca (=tya) の語尾を取るものは語根の c, n, i, r 等に終る場合に多し。vi + vic vivicca, viviccitvâ (第二の形は cca, tvâ 二種の語尾を併せ取れるものと見るべし)。

â + han âhacca; âhanitvâ (打ちて)

ava + i avecca (了知して. 明瞭に. 巧妙に)

ariyasaccâni avecca passati 諸聖諦を了知して(明瞭に)見る。

sañ + kar sañkacca

(iii) ya は 時として語根の最後の父音と同化す。

â + gam â-gam-ya = âgamma; âgantvâ, âgamitvâ (來りて)

u + pad up-pad-ya = uppajja; uppajjitvâ (生じて)

u + dis ud-dis-ya = uddissa; uddisitvâ (指示して)

(iv) 父音の最後の h は語尾 ya の前には h, y 其位地を轉換す。

â + ruh + ya âruyha (昇りて) ava + gah + ya ogayha (沈みて)

§ 206. 連續體の語尾 ya は時として省略せらるゝことあり。

abhi + ñâ abhiññâya = abhiññâ (證知して)

pañi + sañ + khâ pañisañkhâya = pañisañkhâ (思惟して)

§ 207. 連續體を作るに極めて不規則なるものあり。

dis disvâ, passiya, datthâ, passitvâ (見て)

pa + âp pappuyya, patvâ, pâpunitvâ (達して)

ati + si atiseyya, atisayitvâ (近づきて)

§ 208. 不定體 Infinitive 動詞の語根若しくは語基に直接又は間接に i を介して語尾 tum, tave, tâye を加へ不定體を作る。

§ 209. tum 語尾。

(i) i を介して之を語基に附加す。

pac pacitum (炊ぐ爲め) kham khamitum (恕する爲め)

har haritum (取去る爲め) bhuj bhuñjitum (食ふ爲め)

(ii) 語根 â に終る時は直接之を附加す。

dâ dâtum (與ふる爲め) ñâ ñâtum (知る爲め)

yâ yâtum (行く爲め) thâ thâtum (立つ爲め)

(iii) 語根 i, î 又は u, û に終る時は是等は時として重音變化を取る。

i etum (行く爲め)

nî netum (導く爲め)

jî jetum, jinitum (語基 jinâ, i) (勝つ爲め)

ki ketum, kinitum (語基 kinâ, i) (賣る爲め)

hû hotum (有る爲め)

su sotum, sunitum (語基 sunu, i) (聞く爲め)

(iv) tum の t は時として語根の最後の父音に同化し、語根の最後の父音は時として t に同化することあり。

gam gantum (行く爲め) bhuñ bhoñtum (食ふ爲め)

labh laddhum (得る爲め) pa+âp pattum (達する爲め)

§ 210. tave, taye 語尾。此等の二は tum に比すれば用例極めて稀なり。

nî netave (導く爲め) pa+hâ pahâtave (棄つる爲め)

ni+dhâ nidhâtave (貯ふる爲め) dis dakkhitaye (見る爲め)

§ 211. 同一語根にして數種の異なる不定體形を有するものあり。

gam (行く) gantum, gamitum

bhuñ (食ふ) bhuñjitum, bhoñtum

pa+âp (達す) pattum, pâpunatum

ñâ (知る) ñâtum, jânitum

budh (覺る) boddhum, buddhitum

gah (執ふ) gahetum, gañhitum

khan (掘る) khantum, khañitum

dis (見る) passitum, dakkhitum, datthum, dakkhitaye

§ 212. 不定體の用例

sathâram datthum gacchâmi 吾世尊を見んが爲めに往く。

saddhammam sotum pattheti 彼正法を聞かんと欲す。

ayam kâlo bhuñjitum 食時至れり。

râjâ arahasi bhavitum 汝王たるに適す。

(三) 語の構成及び合成語

第一章 Kila 語基構成法 (Kitappaccayo)

§ 213. 巴利語の名詞、形容詞の語基を構成する方法に kita, tad-dhita の二種あり。kita 語基構成法とは語根に kita 接尾音を附加して名詞形容詞の語基を構成する方法の謂なり。

§ 214. 動詞篇中に説明したりし

1. 現在分詞の接尾音 m, nta, mâna

2. 未來分詞の接尾音 issam, nta, mâna, âna

3. 過去分詞の接尾音 ta, na, vâ, vî

4. 義務分詞の接尾音 tabba, ya, anîya

5. 連續體の接尾音 tvâ, tvâna, tûna, ya, cca

6. 不定體の接尾音 tum, tâje, tave

等亦各々一種の kita 語基構成音に外ならず。吾人は既に是等の接尾音を説明し終りたれば茲には唯是等以外の kita 接尾音のみに就き説明を加ふべし。

§ 215. 語根を轉じて語基を作るに當り語根の第一母音は時として重音變化を取る。語基構成音を附加する場合に語根の最後の母音は多く省除せらる。

§ 216. a 接尾音。

(i) 行爲を意味する場合。

pac (炊ぐ・料理す) pâka 料理すること・料理

caj (棄つ) câga 棄つること・棄捨

yuj (意を專注す) yoga 専心

(ii) 作爲者を意味する場合。

puññaṃ (善業を) + kar (爲す) puññakāra (善業を爲すもの)
斯かる場合に於て語根の前に来る名詞は upapada と稱せられ
意義上業格なり。代名詞も亦 upapada として用ひらるゝ場合
あり。

taṃ (其を) + kar (爲す) takkāra (其を爲すもの)
upapada の語尾は常に消滅するものなれども時としては全く消
滅することなく次なる語根の父音に同化することあり。

dīpaṃ (燈明を) + kar Dīpaṅkara (燃燈佛)

(iii) 語根若し i, ī; u, ū に終る時は是等は先づ重音變化を爲し更
に半母音變化をなす。

vi + nī + a = vi + n + e + a = vi + n + ay + a = vinaya (律)

bhū + a = bh + o + a = bh + av + a = bhava (有)

§ 217. aka 接尾音. を附加する場合には時として語根接尾音の
間に āy 又は āv を加へ語根の母音を省除することあり。

dā (與ふ・施す) dāyaka (施主)

nī (導く) nāyaka (導師)

su (聞く) sāvaka (聲聞)

§ 218. 其他の kita 接尾音。

tu kar (爲す) kattu (爲すもの)

語根の最後の父音 r は t に同化す (§ 53)。

āvi bhaya (怖畏) + diss (見る) + āvi = bhayaḍassāvi (怖畏を見
るもの) (語根の母音 i は a に變ず)

ī brahma (梵) + car (行ふ) + ī = brahmacāi (梵行士)

ana sev (奉仕す) sevana (奉仕)

vaddh (増加す) vaddhana (増加)

gah (捕ふ) gahana (捕捉)

ñā (知る) ñāna (知慧)

ū pāra (彼岸) + gam (行く) + ū = pāragū (彼岸に達せる人)
bhikkh (乞ふ) bhikkhu (乞士・比丘)

此例に於て接尾音 ū は u となれり。

vi + ñā (知る) viññū (上智のもの)

i ā + dā (與ふ) + i ādi (原始・本初)

udaka (水) + dhā (保つ) udadhi (海)

ti man (思ふ) mati (思惟)

gam (行く) gati (行・趣)

tha sam (靜まる) samatha (寂靜・止・奢摩他)

ma bhī (怖る) bhīma (恐怖)

disa, risa, dikkha, dī 等 此等の接尾音の前に来る短母音は凡
て長音となる。

ima (i) īdisa, īrisa, īdikkha, īdī 斯の如き

ya yādisa, yārisa, yādikkha, yādī 某の如き

ta tādisa, tārisa, tādikkha, tādī 其の如き

amha (ma) mādisa, mārīsa, mādikkha, mādī 我が如き

kiṃ kīdisa, kīrisa, kīdikkha, kīdī 何の如き

ita etādisa, etārīsa, etādikkha, etādī 此の如き

samāna (sa) sādīsa, sadīsa 等しき

第二章 Taddhita 語基構成法 (Taddhitappaccayo)

§ 219. Taddhita 語基構成法とは kita 語基構成法によりて作りた
る名詞形容詞に taddhita 接尾音を加へ更に他の名詞形容詞を
構成する方法を謂ふ。名詞形容詞を轉じて taddhita 語基の語
を作るに當り原語の第一母音は多く重音變化を受く。而して原
語基の最後の母音は多くの場合に於て消滅す。

§ 220. 宗族苗裔を意味する taddhita 接尾音の主要なるもの。

a	Vasit̥tha の子又は苗裔 Vāsīt̥tho (男), Vāsīt̥tham (中), Vāsīt̥thā (女) 以下皆此法に倣ひて三性を作り得べし。
āyana, āna	Kaccāyana, Kaccāna Kacca の子又は苗裔 Sākaṭāyana, Sākaṭāna Sakata の子又は苗裔
eyya	Venateyya Vinatā (女) の子又は苗裔 Kattikeyya Kattikā (女) の子又は苗裔
i	Dakkhi Dakkha の子又は苗裔 Sakyaputti Sakyaputta (釋子) の子又は苗裔 Dāsarathi Dasaratha の子又は苗裔
era	sāmaṇera (沙彌) samaṇa (沙門) の子. 沙彌は 猶ほ沙門の兒の如し。

§ 221. 接尾音 ika は多くの異なる意義の語を作る。

- (i) を混ぜる telikaṃ [bhojanaṃ] tela (油) を混ぜる食物
- (ii) にて行く sākaṭika sakata (車) にて行くもの
- (iii) を學ぶ. に熟せる ābhidhammika, abhidhammika
abhidhamma (阿毘曇) に熟せる. 或は之を學ぶもの
- (iv) にて作せる mānasikaṃ [kammaṃ] mana=manas (心)
にて作せる業
- (v) 所屬の sārīrikā [vedanā] sarīra (身) 所屬の受. 身にて
感ずる受
- (vi) に関係ある dovārika dvāra (門) に関係あるもの. 門衛
- (vii) を奏する veṇika vṇā (琵琶の一種) を彈奏するもの
- (viii) に信仰ある buddhika buddha (佛陀) に信仰ある. 信佛家
- (ix) の聚集 kumbhika kumbha (瓶) の聚集
- (x) に生れたる. に住める. Māgadika Magadha (摩竭陀) 國.
に生れたるもの. 或其國に住めるもの. 或其君主たる.

- § 222. a 接尾音. (i) 宗族苗裔の意義のものは既に之を述べたり.
(ii) にて染めたる kāsāva kasāva (帶赤黄色の一種の染料)
にて染めたるもの. 袈裟
(iii) の肉 māsisa mahisa (水牛) の肉
(iv) に生れたる. より來れる. に住める. の君長たる
Aṅga Aṅga (央伽) 國に生れたる. 此國より來れる. 此國
に住める. 或は其君長たる.

§ 223. 其他の taddhita 接尾音.

ima (なる), iya (なる. ある), kiya (に屬する) 等	
pacchima pacchā (後) なる antima, antiya anta (最後) なる	
puttima, puttiya putta (兒) ある Andhakiya Andha (案達羅) に屬する	
ālu (多き) abhiṇṇālu abhiṇṇā (貪) 多き. 多食の maya (にて作れる) sovaṇṇamaya suvaṇṇa (黄金) にて作れる ya, tta, tā (たること. 状態. 位置)	
pañḍicca paṇḍita (賢者. 識者) たること paṇḍit+ya	
kosalla kusala (熟練なる) の状態. 熟練	
sāmañña samaṇa (沙門) たること	
manussatta, manussatā manussa (人) たること	
nīlatta, nīlatā nīla (青) の状態. 青色	
arahatta, arahatā araha (阿羅漢) たること. 羅漢果	
vi, mantu, vantu, a 共に所有の義を有す	
medhāvī medhā (智慧) を有する. 有智の	
satimantu sati (念) ある. 有念の	
āyasmantu āyu (壽) ある. 具壽 (āyas は āyu の變形なり).	
guṇavantu guṇa (德) ある	
saddha saddhā (信仰) ある.	

kkhattum, dhâ, thâ, tham, tra 等. 凡て不轉語なり (§ 242 ff.)

ekakkhattum 一たび	bahukkhattum 數多たび
ekadhâ 一種の方法にて	anekadhâ 種々の方法にて
sabbathâ あらゆる方法にて	aññathâ 他の方法にて
katham 如何にして	ittham 斯の如くして
kutra 何處に	tatra 此處に

第三章 六合釋 (Compound, Samâso)

§ 224. 二箇若しくは二箇以上の名詞を連結して複合名詞を作る。其方法に六種あり。所謂六合釋是なり。

- (i) 持業釋 (kammadhârayo) mahâpuriso (大士) asubhasaññâ (不淨觀) amanusso (非人)
- (ii) 帶數釋 (digu) tilokam (三界) catusaccam (四諦) catuddisâ (四方)
- (iii) 依主釋 (tappuriso) saccavâdî (真理を語るもの) yâgutandulâ (粥を煮る爲めの米)
- (iv) 有財釋 (bahubbîhi) jitindriyo (根を制せるもの) dasabalo (十力あるもの。佛陀) asamo (無等のもの)
- (v) 相違釋 (dvando) candasuriyâ (月と日) nâmarûpam (名色) pattacîvaram (鉢と衣。衣鉢)
- (vi) 隣近釋 (avyayîbhavo) upanagaram (都近く) yatthâvuddham (年次に) anvaddhamâsam (半月毎に)。

§ 225. 持業釋 前後兩節の語の一が他に對して形容詞的關係を有する場合と同格的關係を有する場合との二種あり。持業釋にては mahanta (大) は常に mahâ となり。santa (善。好) は多くの場合に於て sa (=sat) となる。

mahâpaññâ (大智)	mahatî ca sâ paññâ câti
sappuriso (善人)	santo ca so puriso câti
nîluppalam (青蓮花)	nîlañca tam uppalañcâti
mukhacando (月面)	mukham cando viyâti (面月の如し)
khattiyabhûto (刹利種生)	khattiyo ca so bhûto câti
rattapaṭi (赤色の粗布)	rattâ ca sâ paṭi câti
Asuro (阿修羅。非天)	na suro = a + suro

否定接頭音 a は母音を以て始むる語の前には an となる (§ 96)。

anasso (非馬)	na asso = an + asso
kuputto (惡兒)	ku + putto
ku (邪。惡。卑) は時としては kad 又は kâ となる。	
kadannam (惡食)	ku + annam = kad + annam
kâpuriso (惡人)	ku + puriso = kâ + puriso
uddhammo (邪法)	u + dhammo = ud + dhammo (§ 30)
vinayapiṭakam (律藏)	vinayo eva piṭakam (同格の例)
purisuttamo (最上人)	uttamo puriso (形容語の後に來る例)

§ 226. 依主釋 前節の語は必ず名詞若しくは名詞と見做さるべき語にして後節の語に對し用格以下於格に至るまで六種の格の關係を有す。依主釋には前節の語の格の語尾は常に消滅することなくして存することあり。râjâ, pitâ, mâtâ 等の如き語の終にある â は依主釋名詞の前節に來る時は短音 a に變ず。

用 gâmagato (村に行ける)	gâmam	gato
saccavâdî (真理を語るもの)	saccam	vâdî
具 buddhabbâsito (佛所説の)	buddhena	bhâsito
sonaleyyo (犬に嘔めらるべき)	sonena	leyyo [kûpo (井)]
爲 buddhadeyyam (佛に奉ずべき)	buddhassa	deyyam
attanopadam (自の爲めの言。爲自言)	attano	padam
parassapadam (他の爲めの言。爲他言)	parassa	padam

此二は前節の格の語尾の消滅せざる例なり。

從	corabhayaṃ (盜賊より生ずる怖畏・盜賊の怖れ)	corato bhayaṃ
	bandhanamutto (束縛より脱せる)	bandhanato mutto
屬	rājaputto (王子)	rañño putto
	dhaññarāsi (穀物の積集)	dhaññassa rāsi
於	rūpasāññā (色想)	rūpe saññā
	antevāsiko (門弟子)	ante vāsiko
	urasilomo (胸毛)	urasi lomo

格の語尾消滅
せざる例。

§ 227. 帶數釋 の前節は常に數詞なり。聚合帶數釋 (samāhāradigu) にありては其語は常に a 語基中性單數形なれども非聚合帶數釋 (asamāhāradigu) にありては複數の形をも取ることあり。

(i) 聚合帶數釋

tilokaṃ (三界)	tiṇṇaṃ lokānaṃ samāhāro (三世界の聚合)
catusaccaṃ (四諦)	chaḷāyatanāṃ (六處)
dasasīlaṃ (十戒)	satayojanaṃ (百由旬)

(ii) 非聚合帶數釋

tibhavā (三有)	tayo bhavā
pañcendriyāni (五根)	pañca indriyāni
ekapuggalo (唯一人)	eko puggalo
dvisatasahassāni (二十萬)	2 × 100 × 1,000 = 200,000

§ 228. 有財釋 は形容詞的複合詞にして形容詞の能を有するものなれば後節の語は常に其が形容する名詞の性、數及び格を逐ふて變化す。持業釋の場合に於けると等しく用格以下六種の格によりて之を分類することを得べし。

用	āgatasamano [saṅghārāmo] (沙門の集來せる僧伽藍)
	āgatā samānā yaṃ so
	āgatasamaṇaṃ [Jetavanaṃ] (沙門の群集せる逝多林)
	āgatasamaṇā [Sāvatthī] (沙門の群集せる舍衛城)

具	jitindriyo [bhagavā] (諸根を制せる世尊)	jitāni indriyāni
	yena so	
	ahitaggi [brāhmaṇo] (火を献ぜる婆羅門)	ahito aggi yena so
爲	dinnasuṅko [rājā] (税を與へられたる王)	dinno suṅko yassa
	upanitabhojano [samaṇo] (供食を受たる沙門)	[so]
從	niggatajano [gāmo] (住民の去れる村)	niggato jano yasmā so
	apetaviññāṇo [matakāyo] (意識なき死骸)	
屬	dasabalo [buddho] (十力ある佛陀)	dasa balā yassa so
	asamo [puggalo] (無等倫の人)	natthi samo yassa so
於	mattabahumātāṅgaṃ [vanam] (衆多の狂象の棲める森)	
	mattā bahavo mātāṅgā yasmiṃ taṃ	

§ 229. i, ū に終る女性名詞及び tu 語尾の男性名詞は接尾音 ka を取りて所有を意味する有財釋名となることあり。

bahukattuko deso	多くの技術家ある地方
bahunadiko janapado	多くの河ある地方
bahukumārikaṃ kulam	多くの女兒ある家族

§ 230. 持業、帶數、依主、相違、隣近釋等の複合詞は何れも有財釋名詞として之を取扱ふことを得べし。

持	sugandho (好香)	sobhano gandho
帶	dvimūlo rukkho (二根ある樹)	dvimūlā, dve mūlā
依	buddhabhāsito dhammo (佛所説の法)	buddhena bhāsito dhammo
相	kusalākusalāni kammāni (善惡業)	
隣	savāhano māro (乗物を有する魔王)	

§ 231. 相違釋 二個若しくは二個以上の同等の名詞の連合して成せる複合名詞を相違釋名詞と云ふ。相違釋に二種類あり。其中聚合相違釋とは身體の部分、音樂、農具、軍兵、虫類、天然の敵、或は本來相對峙せる事物等の名稱の聚合せるものを言ふ。其常

に中性單數形なるべきこと聚合帶數釋の場合に於けると等し。

cakkhusotam (眼と耳)	cakkhu(m) ca solañca
gītavāditam (歌と樂)	gītañca vāditañca
yuganaṅgalam (輓と犁)	hatthassam (象軍と馬軍)
ḍaṃsamakasam (蠱と蚊)	kākolūkam (烏と梟)
nāmarūpam (名色)	dāsīdāsam (婢と奴)

非聚合相違釋名は聚合相違釋名と等しく中性單數の形を取ると同時に其後節の名詞の性に從ひ複數の形をも取るものと言ふ。此種の相違釋は異種類の草木、獸畜、財寶、穀物、國土の名稱の聚合を示すものに多し。

muñjababbajam, muñjababbajā	ムンヂャ草とバツバヂャ草
ajelakam, ajelakā	山羊と羊
jātarūparajataṃ, jātarūparajatā	金と銀
sāliyavam, sāliyavā	米と麥
Kāsikosalam, Kāsikosulā	迦尸國と拘薩羅國

§ 232. 隣近釋 副詞的複合詞にして語の始めには常に不轉語を有す。語の終の常に中性單數用格の形なるものと從格其他の格の形を取るものとあり。

anuratham (車後に)	rathassa anu pacchā
nimmakasam (蚊なく)	makasānam abhāvo
anvaḍḍhamāsam (半月毎に)	aḍḍhamāsam aḍḍhamāsam anu
paṭisotam (流に反して)	sotassa paṭilomam
āpabbatam, āpabbatā (從) (山に至るまで)	
upanagaram, npanagare (於) (都近く)	
yāvajīvam, yāvajīvā (從) (生命のある限り) yattako paricchedo jivassa	
yathāvuddham (年次に)	ye ye vuddhā

第四章 格 (Kārako)

§ 233. 巴利語の格に體呼用具爲從屬於の八種あることは前に既に述べたる所の如し (§85)。

§ 234. 體格. とは一文章の主體たる語にして日本語の「が」又は「は」の辭を以て譯すべきものなり。

sūdo odanam pacati	廚士は飯を炊ぐ。
sūdena odano paccate	飯は廚士の爲めに炊がる。
buddham vande (aham)	(我れ) 佛を禮す。
visam gilati (so)	(彼れ) 毒を仰ぐ。

§ 235. 呼格. は全く獨立せる格にして他を呼びかくるに用ひらるゝものなり。

buddha! mam pālaya	佛よ、我を守らせ給へ。
--------------------	-------------

§ 236. 用格. は「に」又は「を」を以て譯すべし。

- (i) 概して他動調の動詞に支配せらる。
āhāro balaṃ janeti 食物は力を與ふ。
- (ii) 運動の目標點を示す名詞は多く用格の形を取る。
nagaram gacchati 彼れ市に往く。
Rājagaham piṇḍāya pāvīsi 受食の爲め王舍城に赴けり。
- (iii) dñh (乳を搾る) yāc (求む) rudh (制す・沮む) pucch (問ふ) bhikkh (乞ふ) sās (教ふ) vac (語る) nī (導く) vah (運ぶ) har (取去る) 等の語根より來れる動詞は二箇の用格を支配す。
dāso bhāram gāmam vahati 僕は荷を村に運ぶ。
Yaññadattam kambalam yācate brāhmaṇo 婆羅門は演若達多に毛衣を求む。

- (iv) vas (住む) thā (立つ) si (臥す) pad (行く) vis (内に入る)
等の如き自動調の語根より來れる動詞は anu, upa, abhi, adhi, ā 等の前置詞により先たるゝ時は用格を支配す。

gāmaṃ adhivasati 村に住む。

Sakkassa saṅgavyatam upapajjati 帝釋天の伴たることを得。帝釋天宮に生る。

- (v) 時間を示す場合。

divasaṃ (終日) māsaṃ (全月) ekaṃ samayaṃ (一時)

- (vi) 序数の形にて度の序数を示す場合。

duṭṭhiyaṃ (二たび) tatiyaṃ (三たび)

- (vii) 距離を示す場合。

yojanaṃ dīgho pabbato 山の長さは一由旬

- (viii) abhito, dhi (=dhi), antarā, parito, anu, pati, pari, upa, antarēna abhi 等の不轉語は亦用格を支配す。

abhito gāmaṃ vasati 村に近く住む。

sādhū Devadatto mātaraṃ anu 提婆達多其母に好し。

upa Sāriputtaṃ 舍利弗に劣れる。

- (ix) 其他の場合。

vinā dhammaṃ = vinā dhammena (具) = vinā dhammā (從)
法なくして

anto ratṭhaṃ = anto ratṭhassa (屬) = anto ratṭhe (於) 國の
内にて

nadiṃ pibati = nadiyaṃ udakaṃ pibati 河に水を飲む。

§ 237. 具格。「にて」「によりて」「を以て」「と共に」等の語を以て譯すべきものにして

- (i) 動作の作者又は作具を詮はす。

buddhena desito dhammo 佛によりて説かれたる法。

cakkhunā rūpaṃ passati 眼を以て色を見る。

- (ii) 原因理由を示す場合。

rukkho vātēna onamati 樹は風の爲めに撓む。

kammunā vasalo hoti 所業によりて首陀羅なり。

- (iii) 移動の通路又は方向。

kena maggena so gato 何れの路により彼は往きしや。

- (iv) 不具の状態を言表はす時不具の部分は具格にて之を示す。

akkhinā so kāṇo 彼は一目眇たり。

- (v) 生, 族, 出, 性質等。

jātiyā khattiyo buddho 佛は生より云へば刹利種なり。

pakatiyā bhaddako 本性善なる。

- (vi) alaṃ, kiṃ, saddhiṃ, samaṃ, saha, vinā 等の不轉語と共に用ひらる。

alaṃ te idha vāsena 汝の此處に住まんと無用なり。

kiṃ te jātāhi dummedha 愚者結髪は汝に何の用がある。

nisīdi bhagavā bhikkhusaṅghena saddhiṃ 座に就き給へり

世尊比丘衆と共に。

tassa abhisekena samaṃ 彼の即位と共に。

tumhehi saha gacchāmi 我れ汝等と共に往く。

puttena saha dhanavā pitā 兒と等しき財ある父。

vinā dosena = vinā dosaṃ (用) = vinā dosā (從) 罪なくして。

- (vii) 別離, 合會の義を示す場合。

piyehi vippayogo dukkho 愛せるものと別るゝは苦。愛別離苦

appiyehi sampayogo dukkho 愛せざるものと合會するは苦。怨憎會苦

- (viii) 事を成すに要する時間を示すに具格を以てすることあり。

divasena patto 一日にして達せる。

ekena māseṇa nagaraṃ gacchi 一月にして都に往けり。

(ix) 其他の場合。

attanā'va attānaṃ sammanuati 自ら己れを選ぶ(體格の意).
 sunuttā mayam tena mahāsamaṇena 我等は善く彼大沙門
 より脱れたり(從格の意).

tena samayeṇa 爾時(於格の意).

§ 238. 爲格. 「に」「へ」又は「の爲めに」等の意を詮はす格にして

(i) 贈與せらるゝ人を示す。

samaṇassa cīvaram dadāti 沙門に法衣を贈る.

buddhassa pupphaṃ yajati 佛に花を供す.

(ii) 用格と等しく移動の目標點を示す。

appo saggāya gacchati 唯數者のみ天界に往く.

(iii) mau (思ふ) 語根の動詞を以て輕侮の意を詮す場合に輕侮せらるゝ人をあらはす名詞代名詞は爲格の形を取る。

kaṭṭhassa tvaṃ maññe 我汝を木片なりと思ふ.

jīvitam tiṇāya na maññe 我れ生命を草片程にも思はず.

(iv) 所有の意義を示す場合。

puttā me natthi 我に兒なし.

(v) alam は「に足る」「に適す」の意を含む 場合には 爲格を支配す。

alam kukkucāya 疑ふに足る.

akkhadhutto so nālam (=na alam) dārabharanāya 賭博を
 事とせる彼れ妻を養ふに適せず.

(vi) attha (目的) hita (利益) sukha (幸福) 等は次の如き 場合には爲格として用ひらる。

ropanassa atthāya 播種の爲めに.

devamanussānaṃ hitāya 人天の利益の爲め.

tassa sukhāya 彼の幸福の爲め.

(vii) silāgh (讃む) han (隠る) upa + thā (侍す) sap (難ず) dhar (負ふ) pih (望む) kudh (怒る) duh (害ふ) iss (嫉む) 等の語根より來れる動詞は爲格を支配す。

buddhassa silāghate 佛を讃歎す.

hanute tuyhaṃ 汝より隠る.

iṇam te dhārayate 汝に債務を負ふ.

duhayati disānaṃ meggho 豪雨諸方に災す.

(viii) namo (歸命), sotthi (吉祥), svāgataṃ (善來) 等の語と共に用ひらる。

namo buddhāya 佛に歸命す!

sotthi pajānaṃ 民に福あれ!

svāgataṃ te (tuyhaṃ) 汝善來!(歡迎するの意).

§ 239. 從格. 「より」「から」なる語を以て譯すべきものにして

(i) 別離の義をあらはす。

gāmā apenti 彼等村より去る. so assā patati 彼馬より落つ.
 nagarā niggato rājā 都城を去れる國王.

(ii) 基點を示す。

avācito upari 阿鼻獄より上. uddham pādatalā 足跡より上.

(iii) 長さ, 幅, 距離等。

yojanaṃ āyāmato 長さ一由旬. yojanaṃ vitthāro 幅一由旬.

(iv) 保護(rakkhaṇaṃ) の義を詮はす場合には保護せらるゝものは從格の形を取る。

yavehi gāvo rakkhati 麥より牛を禦ぐ.

ucchuto sigāle rakkhanti khetto 畑に於て糖樹より野干を
 禦ぐ.

(v) 或ものより他のものゝ隠るゝ意を表はす場合には前者は從格の形を取る。

upajjhāyā antaradhāyanti sisso 弟子, 和尚より身を隠す.

- (vi) 逃避 (*āraṭi*), 解脱 (*pamocanaṃ*), 恐怖 (*bhayaṃ*) 等の意義を有する動詞は從格を支配す。
pāpadhammato viramati 邪法より逃る。
so parimuccati jātiyā 彼れ生より脱る。
corebi bhāyāmi 我盜賊を恐る。
- (vii) 具格に於ける場合と等しく原因道理を表はすことあり。
vācāya marati 言葉の爲めに死す。
sīlato naṃ pasamsanti 持戒の故を以て人彼を讃歎す。
- (viii) *ārakā* (遙かに); *upari* (上に); *aññatra, rahitā, rite, vinā* (無くして); *nānā* (異なり); *ā* (に至るまで); *patī* (反して, 對して); *apa* (離れて) 等の不轉語或は前置詞は從格を支配す。
buddhasmā pati Sāriputto 佛陀に等しき舍利弗。
ārakā dhammavinayā 此教法に遠ざかれる。
rite saddhammā 正法なくして。
ā Brahmālokā 婆羅門界(梵天)に至るまで
- (ix) 從格は用具屬於等の諸格の代りに用ひらるゝことあり。
vinā saddhammā = vinā saddhammaṃ (用) = *vinā saddhammena* (具) 正法なくして。
samīpaṃ gāmā = samīpaṃ gāmaṃ (用) = *samīpaṃ gāmena* (具) = *samīpaṃ gāmassa* (屬) 村に近く。
- § 240. 屬格。「の」の辭を以て譯すべきものにして
- (i) 所有の意を表はす。
bhikkhuno pattacīvaraṃ 比丘の鉢衣。
rukkhassa sākā 樹の枝。
- (ii) 差異, 類同の義を有する語と共に用ひらるゝ場合。
tassa antaraṃ na passimsu 彼等は其差異を見ざりき。
sadiso pitu = pitarā sadiso (具) 父に等しき。
rañño putto 國王の子・王子。
mātu samo = mātaraṃ samo (具) 母に等しき。

- (iii) 恭敬, 親愛, 熟練等の義を有する語と共に用ひらる。
sā brāhmaṇassa manāpā 彼女は婆羅門の愛者。
gāmassa pūjito = gāmena pūjito (具) 村民に敬せられたる。
kusalā naccagītassa = kusalā naccagīte (於) 歌舞に巧なる。
- (iv) 時間, 距離, 位置等を示す語と共に用ひらる。
amhākaṃ buddhassa pubbe 我等の佛陀出世前。
gāmassa avidūre 村に近く。
- (v) 記憶, 施與, 願望, 充滿, 恐怖等の意を有する動詞は屬格を支配す。
mātussa sarati = mātaraṃ sarati (用) 其母を記憶す。
pūراتi bālo pāpassa 愚者罪に滿つ。
sabbe tasanti daṇḍassa 凡て刑罰を恐る。
kiṃ nu kho ahaṃ sunakkhā bhāyāmi 如何なれば我犬を恐るべき (此例に於ては從格の形を取る)。
- (vi) 信仰の義を表はす動詞は屬格又は於格を支配す。
buddhassa pasanno = buddhe pasanno 佛陀に信仰ある。
- (vii) 形容詞の最上級又は之と同一義の辭若し一文章中に来る時は其比較の標準となれる語は屬格又は於格なり。
pattikānaṃ 或 *pattikesu dhāvaṃ sīghatamo* 道行く人の中にては走るもの最も疾し。
narānaṃ 或 *naresu khattiyo sūratamo* 人の中にて刹利種最勇なり。
brāhmaṇānaṃ 或 *brāhmaṇesu Devadatto paṇḍito* 提婆達多是婆羅門中の智者なり。
- (viii) *sāmī* (主所有者), *issaro* (君王), *adhipati* (首長), *dāyādo* (嗣續者), *patibhū* (代人), *pasūto* (子孫), *kusalo* (巧なる) 等の語は屬格又は於格を支配す。
gonāṃ 或 *gonesu sāmī* 牛の所有者。

- (ix) 一文章中に二個の主體ある場合には一を其實辭と共に屬格又は於格の形に作る。之を獨立屬格又は獨立於格と云ふ。

rudato dārakassa so pabbaji

rudantasmiṃ dāraṃ so pabbaji

兒の泣くに (も拘はらず) 彼は出家せり。

§ 241. 於格。「にて」「に於て」等の辭を以て譯すべし。

- (i) 物又は人の存在する場所、若くは動作の遂行せらるゝ場所を表はす。

kaṭṭhe nisīdati puriso

人蓆に坐す。

thāliyaṃ odanaṃ pacati

釜にて飯を炊ぐ。

- (ii) 時を示す。

sāyaṇhasamaye āgato

晡時に來れる。

- (iii) 原因目的を示す。

dīpī cammesu haññate

豹は皮の爲めに殺さる。

kuñjaro dantesu haññate

象は牙の爲めに殺さる。

- (iv) 捕捉、接吻、敬禮の意を有する動詞は於格を支配す。

bāhāsu gahetvā

手を取りて。

muddhani cumbitvā

頭に接吻して。

bhikkhusu abhivādetvā

比丘等を禮して。

- (v) 於格は他の格に代用せらるゝ例極めて多し。

具 hatthesu piṇḍāya carati 手を以て分衛しつゝ來往す。

爲 saṅghe dinnam mahapphalam 僧伽に施したるは大果報あり。

從 kadalisu gaje rakkhanti 芭蕉樹より象を防ぐ。

用格及び屬格に代用せらるゝ場合は上に既に述べたる所の如し。

(四) 不 轉 語

§ 242. 不轉語 Nipātapadam とは副詞、前置詞、接續詞、間投詞等にして文法上何等の變化をも受けざるものを云ふ。

§ 243. 副詞的不轉語 に轉成副詞、格形副詞、純粹副詞の三種あり。此中

轉成副詞 Derivative Adverb とは前置詞、數詞、名詞、代名詞、形容詞等の語基に副詞的接尾音を加へて作りたる副詞を云ふ。

- (i) taddhita 接尾音 dhā, thā, thām 等を以て作りたる語も亦一種の轉成副詞なり (§ 223)。

ekadhā (一種の方法にて)

bahudhā (種々の方法にて)

tathā (斯くして)

ubhayathā (兩種の方法にて)

katham (如何にして)

ittham (斯の如くして)

- (ii) 從格語尾 to を前置詞、代名詞、形容詞に附加して副詞を作る。

abbhito (近く・前に)

parato (遙かに・後に)

dakkhinato (南方に當りて)

piṭṭhito (背後より・後にて)

sabbato (到處・所有る方面より) kuto (何處より)

疑問代名詞 kim の語基 ka は時として ku となることあり。

- (iii) tra 及び ttha は代名詞、形容詞と合して場所を表はす副詞となる。

tatra, tattha (其處に・此處に)

kutra, kuttha, kattha (何處に)

- (iv) dā, dhi, so 等。

ekadā (一度)

sabbadā (常時)

sabbadhi (到處・所有る方面に於て)

babuso (大に・夥しく)

atthaso (意義の上より)

§ 244. 格形副詞 Case-form Adverb 名詞、代名詞、形容詞の或格は副詞として用ひらる。

(i) 用格

divasam 日中 rattim 夜時 raho 竊かに saccam 實に
 kim 何故 idam 此處に tam 其處に. 其故
 ciram 長く khippam 速かに mandam 徐ろに

(ii) 具格

divasena 一日にて māsena 一月にて
 tena 其故 yena 如何となれば
 cirena 長く dakkhinena 南方に uttarena 北方に

(iii) 爲格

atthāya ...の爲めに cirāya 長く

(iv) 從格

kasmā 何故 yasmā 如何となれば

(v) 屬格

kissa 何故 cirassa 長く

(vi) 於格

bāhire 外部に dūre 遠く avidūre 近く rahasi 竊かに

§ 245. 純粹副詞 Pure Adverb.

kira, kila 傳ふらく hi, khalu, tu 實に atha, atho 爾時
 na 否定語 mā 禁止語 no 否
 evam, āma 然り nanu, nu 疑問文中に用ひらる
 nūna 實に. 慥かに. 恐くは kva 何處に

§ 246. 接續詞 Conjunction.

ca 與. 並. 及 文の始めに用ひらるゝことなし
 atha 爾時. 而して. 斯くて
 vā, uda, udavā, udāhu 或 vā.....vā 或は.....又
 yadi, sace 若し yadi evam = yajj'evam 若し然らば
 hi 如何となれば

§ 247. 間投詞 Interjection.

aho オー. アー
 are ヤイ. 奴. 咄
 dhi, dhî 聡哉
 bho 君よ. 友よ
 he オー
 sādhu 善哉. 諾



JĀTAKAM.

I. MAKHĀDEVA-JĀTAKAM (9).

ATĪTE Videharaṭṭhe Mithilāyaṁ Makhādevo nāma rājā ahoṣi
dhammiko dhammarājā. So caturāsitivassasahassāni kumā-
rakīlaṁ tathā oparajjāṁ tathā mahārajjāṁ katvā dīghaṁ
addhānaṁ khepetvā ekadivasaṁ kappakaṁ āmantesi: “yadā me
samma kappaka sirasmiṁ phalitāni passeyyāsi atha me āroceyyāsi”ti.
Kappako’pi dīghaṁ addhānaṁ khepetvā ekadivasaṁ rañño añjana-
vaṇṇānaṁ kesānaṁ antare ekam’eva phalitaṁ disvā “deva, ekaṁ te
phalitaṁ dissatī”ti ārocesi, “tena hi me samma taṁ phalitaṁ
uddharitvā paṇimhi ṭhapehi”ti ca vutto suvaṇṇasaṇḍāsena uddharitvā
rañño paṇimhi patitṭhāpesi. Tada rañño caturāsitivassasahassāni
āyūṁ avasitṭhaṁ hoti. Evaṁ sante pi phalitaṁ disvā va maccu-
rājānaṁ āgantvā samipe ṭhitāṁ viya attānaṁ adittapaṇṇasālaṁ
pavitṭhaṁ viya ca māṇṇamāno samvegāṁ āpajjitvā “bāla Makhādeva,
yava phalitassa uppādāva ime kilese jahitum na sakkhi”ti cintesi.
Tass evaṁ phalitapātubhāvaṁ āvajjantassa āvajjantassa antodaḥo
uppajji, sariraṁ seditvā mūccimsu sātakaṁ piḍetvā apānetabbakārappattā
ahesum. So “ajjeva mayā nikkhamitvā pabbajitum vattatī”ti
kappakassa satasahassatṭhānaṁ gāmaṇāraṁ datvā jettṭhaputtāṁ
pakkosāpetvā “tāta, mama sise phalitaṁ pātubhūtaṁ, mahallako’ mhi
jāto, bhutṭā kho pana me mānusakā kāmā, idāni dibbakāme pariyesis-
sāmi, nekkhammakālo mayhaṁ, tvāṁ imāṁ rajjāṁ paṭipajja, ahaṁ

pana pabbajitvā Makhādevambavanuyyāne vasanto samanadhammañ
karissāmi"ti āha. Tam evaṃ pabbajitukāmaṃ amaccā upasañka-
mitvā "deva, kiṃ tumhākaṃ pabbajjākāraṇaṃ"ti pucchimsu. Rājā
phalitāṃ haṭṭhena gaheṭvā amaccānaṃ imāṃ gāthāṃ āha:

Uttamaṅgarūhā mayhaṃ ime jātā vayoharā
pātubhūtā devadūtā, pabbajjāsamāyo māmā'ti.

So evaṃ vatvā taṃ divasaṃ'eva rajjaṃ pahāya isipabbajjaṃ pabbajitvā
tasmiṃ' űeva Makhādevambavane viharanto caturāsītivassasahassāni
catthāro brahmavihāre bhāvetvā aparihīnājjhāne tthito kālaṃ katvā
Brahmaloke nibbattitvā puna tato cuto Mithilāyaṃ yeva Nimi nāma
rājā hutvā osakkamānaṃ attano vaṃsaṃ ghaṭetvā tatth'eva amba-
vane pabbajitvā brahmavihāre bhāvetvā puna Brahmalokūpago'va
ahosi.

II. NACCA-JĀTAKAṆ (32).

Atite paṭhamakappe catuppadā sihaṃ rājānaṃ akāmsu, macchā
Anandamacchaṃ, sakunā suvaṇṇahamsaṃ. Tassa pana suvaṇṇarā-
jahamsassa dhītā hamsapotikā abhirupā alicsīti so tassā vāraṃ adāsi.
Sā attano cittarucitaṃ sāmikaṃ vāresi. Hamsarājā tassā vāraṃ datvā
Himavante sabbasakune sannipātāpesi. Nānappakārā hamsamorādayo
sakunaganaṃ samāgantvā ekasmiṃ mahante pāsānatale sannipatimsu.
Hamsarājā "attano cittarucitaṃ sāmikaṃ āgantvā gaṇhatū"ti dhītaraṃ
pakkosāpesi. Sā sakunasāṅghaṃ oloketi mahivāṇṇagivaṃ citrapek-
khunāṃ morāṃ disvā "ayāṃ me sāmiko hotū"ti rocesi. Sakuna-
saṅghā morāṃ upasaṅkamitvā āhaṃsu: "sāmma mora, ayāṃ rāja-
dhītā ettakānaṃ sakunānaṃ majjhe sāmikaṃ rocenti tayi ruem
uppādesi"ti. Moro "ajjā'pi tāva me balaṃ na passasi"ti atituttthiya

hirottappaṃ bhinditvā tāva mahato sakunasāṅghassa majjhe pakkhe
pasāretvā naccitum ārabhi, naccanto appaticchanno ahosi. Suvaṇ-
ṇahamsarājā lajjito "imassa n'eva ajjhattasamuttthānā hiri atthi na
bahiddhāsamuttthānaṃ ottappaṃ, nāssa bhinnahirottappaṃ mama
dhītaraṃ dassāmi"ti sakunasāṅghamajjhe imāṃ gāthāṃ āha:

Rudāṃ manuṇṇāṃ rucirā ca piṭṭhi veluriyavaṇṇupanibhā ca givā
vyāmamattāni ca pekkhunāni, naccena te dhītaraṃ na dadāmi'ti.

Hamsarājā tasmiṃ yeva parisamajjhe attano bhāgineyyahamsapota-
kassa dhītaraṃ adāsi. Moro hamsapotikaṃ alabhitvā lajjitvā
tato'va uttthahitvā palāyi. Hamsarājā'pi attano vasaṇatthānaṃ eva
gato.

III. SŪKARA-JĀTAKAṆ (153).

Atite Barāṇasiyaṃ Brahmādatte rajjaṃ kārente Bodhisatto siho
hutvā Himavantapādese pabbataguhāya vāsaṃ kappesi. Tassā vidūre
ekam saraṃ nissāya bahusūkarā nivāsaṃ kappesum. Tam'eva
saraṃ nissāya tāpasā'pi paṇṇasālāsu vāsaṃ kappesum. Ath'
ekadivasaṃ siho mahisavāraṇādisu añnataraṃ vadhitvā yāvadattham
maṃsaṃ khādītva taṃ saraṃ otaritvā paṇiyāṃ pivitvā uttari.
Tasmiṃ khāne eko thullasūkaro taṃ saraṃ nissāya gocaraṃ gaṇhāti.
Siho taṃ disvā "aññaṃ ekadivasaṃ imāṃ khādissāmi, maṃ kho pana
disvā puna n'āgaccheyyā"ti tassā anāgamaṇabhayaṇa sarato uttaritvā
ekena passena gantum ārabhi. Sūkaro oloketvā "ēsa maṃ disvā
mama bhayaṇa upagantum asakkonto bhayaṇa palāyati, ajjā mayā
imāṃ sihena saddhim payojetum vattati"ti sisam ukkhipitvā taṃ
yuddhatthāya avhayanto paṭhamāṃ gāthāṃ āha:

Catuppado aham samma, tvam'pi samma catuppado,
ehi siha, nivattassu, kin nu bhito palāyasi'ti.

Siho tassa katham sūtvā "samma sūkara, ajja amhākam tayā saddhim
saṅgāmo n'atthi, ito pana sattame divase imasmim eva thāne saṅgāmo
hotū"ti vātvā pakkāmi. Sūkaro "sihena saddhim saṅgāmessāmi"ti
tutthapahattho tam pavattim nātakānam ārocesi. Te tassa katham
sūtvā bhītatasi "idāni tvam sabbe'pe amhe nāsessasi, attano balam
ajānitvā sihena saddhim saṅgāmanam kātukāmo'si, siho āgantvā sabbe'pi
amhe jīvitakkhayam pāpessati, sāhasikakammam mā kārī"ti āham'su.
So bhītatasi "idāni kin karomī"ti pucchi. Sūkarā "etesam tāsā-
nam ukkārabhūmim gantvā pūtigūthe sattadivasāni sarīram vāttetvā
sarīram sukkhāpetvā sattame divase sarīram ussāvabindūhi temetvā
sīhassa āgamanato purimatarān āgantvā vātayogam natvā uparivāte
tiṭṭha, suci jātiko siho tava sarīragandham ghāyitvā tuyham jayam
dātvā gamissati"ti āham'su. So tathā katvā sattame divase tāttha
atthāsi. Siho tassa sarīragandham ghāyitvā gūthamakkhitabhāvam
natvā "samma sūkara, sundaro te lesa cintito, sace tvam gūthamak-
khito nābhavissa idh'eva tam jīvitakkhayam apāpessam, idāni pana
te sarīram n'eva mukhena dasitum na pādēna pabaritum sakkā, jayam
te dāmi"ti vātvā dutiyam gātham āha:

Asuci pūtilomā si, duggandho vāsi sūkara,

sace yujjhitukāmo'si jayam, samma, dādāmi te'ti.

Siho nivattitvā gocharam gahetvā sīre paṇiyam pivātvā pabbatagubhān
eva gato. Sūkaro'pi "siho me jito"ti nātakānam ārocesi. Te
bhītatasi "puna ekadivasam āgacchanto siho sabbe'va amhe jīvitak-
kayam pāpessati"ti palāyitvā añnattha agamāmsu.

IV. BÂVERU-JĀTAKAM (339).

Atīte Bārānasiyam Brahmadatte rajjam kārente Bodhisatto Mora-
yoniyam nibbattitvā vuddhim anvāya sobhaggappatto araṇṇhe vicari.
Tadā ekacce vāṇijā disākākam gahetvā nāvāya Bāverurattṭham aga-
mam'su. Tasmim kira kāle Bāverurattṭhe sakunā nāma natthi. Aga-
tāgatā rattṭhavāsino tam kūpagge nisinnam disvā "passath'imassa
chavivaṇṇam galapariyosānam mukhatuṇḍakam maṇigūlasadisāni
akkhūṇi"ti kākam'eva pasāmsitvā te vāṇijake āham'su: "imam ayyo
sakunam amhākam detha, amhākam hi iminā attho, tumhe attano
rattṭhe añṇam labhissathā"ti. "Tenā hi mūlena gaṇhathā"ti. "Kahā-
panena no dethā"ti. "Na demā"ti. Anupubbena vaddhetvā "satena
dethā"ti vutte "amhākam esa bahūpakāro, tumhehi pana saddhim
metti hotū"ti kahāpanasatam gahetvā adam'su. Te tam gahetvā
suvannapaṇjare pakkhipitvā nānappakārena macchamāmsena c'eva
phalāphalena ca paṭijaggiṃsu. Añṇesam sakunānam avijjamānatthāne
dasahi asaddhammehi samannāgato kāko lābhaggayasaggappatto
ahosi. Punavāre te vāṇijā ekam mayūrarājānam gahetvā yathā
accharāsaddena vassati paṇippahārasaddena naccati evam sikkhāpetvā
Bāverurattṭham agamāmsu. So mahājane sannipatite nāvāya dhure
thatvā pakkhe vidhūnitvā madhurassaram nicchāretvā nacci. T. 6
Manussā tam disvā somanassajātā "etaṃ ayyo sobhaggappattam
susikkhitasakunārājānam amhākam dethā"ti āham'su. "Amhehi
paṭhamam kāko añito, tam gaṇhittha, idāni etaṃ morarājānam
ānāyimha, etaṃ'pi yācatha, tumhākam rattṭhe sakunam nāma
gahetvā āgantum na sakkā"ti. "Hotu ayyo, attano rattṭhe añṇam
labhissatha, imam no dethā"ti mūlam vaddhetvā sahasena gaṇhiṃsu.
Atha nam sattaratana vicitte paṇjare thāpetvā macchamāmsaphalā-

phalehi c'eva madhulâjasakkharâpanakâdhi ca patijagginisu. Mayû-
rarâjâ lâbhaggayasaggappatto jâto. Tass'âgatakâlato patthâya kâkassa
lâbhasakkâro parihâyi, koci nam oloketum pi na icchi. Kâko khâda-
niyabhojaniyam alabhamâno kâkâ'ti vassanto gantvâ ukkârâbhûmiyam
otari.

Adaṣṣanena morassa sikkhino mañjubhânino
kâkam tattha apûjesum mañsena ca phalena ca.

Yadâ ca sarasampanno moro Bâverum'âgamâ
atha lâbho ca sakkâro vâyasassa ahâyatha.

Yava n'uppajjati Buddho dhammarâjâ pabhañkaro
tâva aññe apûjesum puthû samañabrâhmaṇe.

Yadâ ca sarasampanno Buddho dhammam âdesayi
atha lâbho ca sakkâro titthiyânamm ahâyathâ'ti.

V. MATAKABHATTA-JĀTAKAM (18).

Atite Bârâṇasiyam Brahmadatte rajjam kârente eko tiṇṇam
vedânamm pâragû disâpâmokkho âcariyo brâhmaṇo "matakabhattam
dassâmî"ti ekam elakam gâhâpetvâ antevâsike âha: "tâtâ, imam
elakam nadim netvâ nahâpetvâ kaṇṭhe mâlam parikkhipitvâ pañ-
caṅgulikam datvâ maṇḍetvâ ânethâ"ti. Te "sâdhû"ti patisupitvâ
tam âdâya nadim gantvâ nahâpetvâ maṇḍetvâ naditîre ṭhapesum.
So elako attano pubbakammam disvâ "evarûpâ nâma dukkhâ ajja
muccissâmî"ti somanassajâto ghaṭam bhindanto viya mahâhasitam
hasitvâ puna "ayam brâhmaṇo mam ghâtetvâ mayâ laddham dukkham
labhissatî"ti brâhmaṇe kârûṇṇam uppâdetvâ mahantena saddena
parodi. Atha nam te māṇavakâ pucchimsu: "samma elaka, tvam

mahâsaddena hasi c'eva rodi ca, kena nu kâraṇena hasi, kena
kâraṇena rodî"ti. "Tumhe mam imam kâraṇam attano âcariyassa
puccheyyâthâ"ti. Te tam âdâya gantvâ idam kâraṇam âcariyassa
ârocesum. Âcariyo tesam vacanam sutvâ elakam pucchi: "kasmâ
tvam elaka hasi, kasmâ rodî"ti. Elako attanâ katakammam jâtissa-
raññena anussaritvâ brâhmaṇassa kathesi: "aham brâhmaṇa pubbe
tâdiso'va mantajjhâyakabrâhmaṇo hutvâ 'matakabhattam das-
sâmî'ti elakam mâretvâ adâsim, sv'âham eka-sa elakassa ghâtitattâ
eken'ânesu pañcasu attabhâvasatesu sîsacchedam pâpunim,
ayam me koṭiyam ṭhito pañcasatimo attabhâvo, sv'ham 'ajja
evarûpâ dukkhâ muccissâmî'ti somanassajâto iminâ kâraṇena hasim,
rodanto pana 'aham tâva ekam elakam mâretvâ pañcâjâtisatâni
sîsacchedadukkham patvâ ajja tasmâ dukkhâ muccissâmi, ayam
pana brâhmaṇo mam mâretvâ aham viya pañcâjâtisatâni sîsacch-
dadukkham labhissatî'ti tayi kârûṇṇena rodin"ti. "Elaka, mâ
bhâyi, nâ'ham tam mâressâmî"ti. "Brâhmaṇa, kiṃ vadesi, tayi
mârente'pi amârente'pi na sakkâ ajja mayâ maraṇâ muccitum"ti.
"Elaka, mâ bhâyi, aham te ârakkham gahetvâ tayâ saddhim yeva
vicarissâmî"ti. "Brâhmaṇa, appamattako tava ârakkho, mayâ
katapâpanam pana mahantam balavan"ti. Brâhmaṇo elakam muñcitvâ
"imam elakam kassaci pi mâretum na dassâmâ"ti antevâsike âdâya
elaken'eva saddhim vici. Elako visaṭṭhamatto'va ekam pâsâṇa-
piṭṭham nissâya jâtagumbe gîvam ukkhipitvâ paṇṇâni khâditum
âradhho. Tam khaṇam eva tasmin pâsâṇapiṭṭhe asani patitâ. Ekâ
pâsâṇasakalikâ chijjitvâ elakassa pasâritagîvâya patitvâ sîsam chindi.
Mahâjano sannipati. Tadâ Bodhisatto tasmin ṭhâne rukkhadevatâ
hutvâ nibbatto. So passantass'eva tassa mahâjanassa devatânubhâ-
vena âkâse pallaṅkena nisîditvâ "ime sattâ evam pâpassa phalam

jānamānā app'evanāma pānātipātān na kareyyu"ti madhurena sarena dhammān desento imān gātham'āha :

Evāñ ce sattā jāneyyūn 'dukkhā'yān jātisambhavo'
na pāno pāninān haññe, pānagbātī hi socatī'ti.

Evān Mahāsatto nirayabhayena tajjetvā dhammān desesi. Manussā tañ dhammadesanān sutvā nirayabhayabhītā pānātipātā niramimsu. Bodhisatto'pi dhammān desetvā mahājanān sīle patitthāpetvā yathā kammān gato. Mahājano'pi Bodhisattassa ovāde thatvā dānādīni puññāni katvā devanagarān pūresi.

VI. NIGRODHAMIGA-JĀTAKAM (12).

Atīte Bārāṇasīyān Brahmadaṭṭe rajjān kārayamāne Bodhisatto migayoniyān paṭisaṇḍhiṃ gaṇhi. So mātukucchito nikkhanto suvaṇṇavaṇṇo ahosi, akkhīni c'assa maṇigūlasadisāni ahesuṃ, siṅgāni rajatavaṇṇāni, mukhān rattakambalapūṇjavāṇṇam, haṭṭhāpādapariyāntā lākhāparikaṇṇamakatā viya, vālādhi caṇṇarassa viya ahosi, sarīraṃ pañ'assa mahantaṃ āssapōtakappaṇāṇān ahosi. So pañcasatamigaparivāro araṇṇe vāsān kappesi nāmena Nigrodhamigarājā nāma. Avidūre pañ'assa aṇṇo'pi pañcasatamigaparivāro Sākhānigā nāma vāsati, so'pi suvaṇṇavaṇṇo'va ahosi. Tena samyena Bārāṇasirājā migavadhāpasuto hoti, vinā mānsena na bhujjati, mānissānaṃ kammaccchedaṃ katvā sabbe negamajānapade saṇṇipātetvā devasikān migavaṇṇaṃ gacchati. Manussā cintesuṃ : "ayaṃ rājā ambhākān kammaccchedaṃ karoti, yaṇṇūna māyān uyyāne migānaṃ nivāpaṇaṃ vapitvā pāṇīyān sampādetvā bahumige uyyāne pavasetvā dvāraṃ bandhitvā raññe niyyādemā"ti. Te sabbe uyyāne nivāpaṇān ropetvā udakān

sampādetvā dvāraṃ yojāpetvā nāgare ādāya muggarādinānāvudha-
haṭṭhā araṇṇān pavisitvā mige pariyesamānā "majjhe thite mige gaṇhissāmā"ti yojānamattān thānaṃ parikkhipitvā saṅkhipamānā Nigrodhamiga-Sākhānigānaṃ vasaṇatthānaṃ majjhe katvā parikkhipimsu. Atha tañ migagāṇān disvā rukkhagumbādayo ca bhūmiṇca muggarehi pāliarantā migagāṇān gahaṇatthānato nibaritvā asisattidhanuādīni āvudhāni uggiritvā mahānādaṃ nādaṃ tañ migagāṇān uyyānaṃ pavasetvā dvāraṃ pidhāya rājānaṃ upasaṅkamitvā "deva, nibaddhaṃ migavaṇṇaṃ gacchantā ambhākān kammān nāsetha, ambhehi araṇṇato mige āpetvā tumhākaṃ uyyānaṃ pūritaṃ, ito paṭṭhāya tesān mānsān khādathā"ti rājānaṃ āpucchitvā pakkamiṃsu. Rājā tesān vacānaṃ sutvā uyyānaṃ gantvā mige olokeṇto dve suvaṇṇā- mige disvā tesān abhayaṃ adāsi. Tato paṭṭhāya paṇa kadāci sāmān ekamigaṃ vijjhivā āneti, kadāci'ssa bhaddakārako gantvā vijjhivā āharati. Migā dhanuṃ disvā'va maraṇabhayena tajjitā palāyanti, dve tayo paḥāre labhitvā kilamanti pi gilānā'pi honti maraṇaṃ pi pāpuṇanti. Migagāṇo tañ pavattiṃ Bodhisattassa ārocesi. So Sākhān pakkosāpetvā āha : "samma, bahū migā nassanti, ekāṇseva maritaḥ sati ito paṭṭhāya mā kaṇḍena mige vijjhantu, dhammagandikāthāne migānaṃ vāro hotu, ekadivasān mama parisāya vāro pāpuṇātu, ekadivasān tava parisāya vāro pāpuṇātu, vārappatto migo gantvā dhammagandikāya sīsān thāpetvā nipajjatu, evān sante migā vāpitā na bhavissanti"ti. So "sādhu"ti saṃpaticechi. Tato paṭṭhāya vārappatto'va migo gantvā dhammagandikāya gīvaṃ thāpetvā nipajjati. Bhaddakārako āgantvā tattha nipannakam'eva gahetvā gacchati. Ath'ekadivasān Sākhānigassa parisāya ekissā gabbhiniṃ migiyā vāro pāpuṇi. Sā Sākhān upasaṅkamitvā "sāmi, ahaṃ pi gabbhini, puttakaṃ vijāyitvā dve janā vāraṃ gamissāma, mayhaṃ

vāram atikkamehi"ti āha. So "na sakkā tava vāram aññesaṃ pāpetum, tvam'eva tuyhaṃ pattam jānissasi, gacchāhi"ti āha. Sā tassa santikā anuggahaṃ alabhamānā Bodhisattam upasaṅkamitvā tam'attham ārocesi. So tassā vacanam sutvā "hotu, gaccha tvam, ahaṃ te vāram atikkamessāmi"ti sayam gantvā dhammagandikāya sisam katvā nipajji. Bhattakārako tam disvā "laddhābhayo migarāja gāṇḍikāya nipanno, kin nu kāraṇaṃ"ti vegena gantvā rañño ārocesi. Rājā tāvad eva ratham āruya mahantena parivārena āgantvā Bodhisattam disvā āha: "samma, migarāja, nanu mayā tuyhaṃ abhayaṃ dinnam, kasmā tvam idha nipanno"ti. "Mahārāja, gabbhinī migā āgantvā 'mama vāram aññassa pāpehi"ti āha, na sakkā kho pana ekassa maraṇadukkhaṃ aññassa upari pakkhipitum, sv'āhaṃ attano jīvitam tassā datvā tassā santakam maraṇam gahetvā idha nipanno, mā aññaṃ kiñci āsaṅkittha mahārāja"ti. Rājā āha: "sāmi, suvaṇṇavanna-migarāja, mayā tādiso khantimettānuddayasampanno manussesu'pi na dīṭṭhapubbo, tena te pasanno'smi, utthehi, tuyhaṃ tassa ca abhayaṃ dassāmi"ti. "Dvīhi abhaye laddhe avasesā kiṃ karissanti narindā"ti, "Avasesānam'pi abhayaṃ dammi sāmī"ti. "Mahārāja, evam'pi uyyāne yeva migā abhayaṃ labhissanti, sesā kiṃ karissanti"ti "Etesam'pi abhayaṃ dammi sāmī"ti. "Mahārāja, migā tāva abhayaṃ labhantu, sesā catuppadā kiṃ karissanti"ti. "Etesam'pi abhayaṃ dammi sāmī"ti. "Mahārāja, catuppadā tāva abhayaṃ labhantu, dvijagāṇā kiṃ karissanti"ti. Etesam'pi dammi sāmī"ti. "Mahārāja, dvijagāṇā tāva abhayaṃ labhissanti, uduke vasantā macchā kiṃ karissanti"ti. Etesam'pi abhayaṃ dammi sāmī"ti. Evam Mahāsatto rājānam sa'obasattānam abhayaṃ yācitvā utthāya rājānam pañcasu sīlesu patitthāpetvā "dhammaṃ cara, mahārāja, mātāpitūsu putta-dhītāsu brāhmaṇagahapatikesu negamajānapadesu dhammaṃ caranto

samam caranto, kāyassa bhedaṃ sugatim saggaṃ lokam gamissasi"ti, rañño buddhalīlāya dhammaṃ desento katipāham uyyāne vasitvā rañño ovādam datvā migaganapariyuto araṇṇam pāvisi. Sā'pi kho migadhenu pupphakaṇṇikasadisam puttam vijāyi. So kīlamāno Sākhāmigassa santikam gacchati. Atha nam mātā tassa santikam gacchantam disvā "putta, iṭṭhaṃ patthāya mā etassa santikam gaccha, Nigrodhasseva santikam gaccheyyāsi"ti ovādati imam gātham'āha:

Nigrodham'eva seveyya, na Sākhā upasaṃvase,

Nigrodhasmiṃ mataṃ seyyo yañce Sākhasmiṃ jīvitam'ti.

Tato patthāya ca pana abhayaṃ laddhakā migā manussānam sassāni khādanti. Manussā "laddhābhayaṃ ime migā"ti paharituṃ vā palāpetuṃ na visahanti. Te rājāṅgaṇe sannipatitvā rañño tam'attham ārocesuṃ. Rājā "mayā pasannena Nigrodhamigavarassa varo dinno, ahaṃ rajjam jāheyyam na ca tam paṭiññaṃ, gacchatha na koci mama vijite mige paharituṃ labhatī"ti. Nigrodhamigo tam pavattim sutvā migaganam sannipātāpetvā "iṭṭhaṃ patthāya paresam sassam khākituṃ na labhathā"ti mige vāretvā manussānam ārocāpesi: "iṭṭhaṃ patthāya sassakāraṃ manussā sassarakkhanattham vatim mā karontu, khettaṃ pana āvijjhivā paṇṇasaṇṇam bandhantū"ti. Tato patthāya kira khettesu paṇṇabandhanasṇam udapādi, tato patthāya paṇṇasaṇṇam atikkamanakamigo nāma natthi, ayaṃ kira nesam Bodhisatto laddhaovādo. Evam migaganam ovaditvā Bodhisatto yāvatāyukam thatvā saddhim migeḥi yathākammaṃ gato. Rājā'pi Bodhisattassa ovāde thatvā puññaṃ katvā yathākammaṃ gato.

VII. URAGA-JĀTAKAM (154).

Alite Bārāṇasiyam Brahmadatte rajjam kārente Bārāṇasiyam

ussave ghosite mahāsamajjam ahosi. Bahū manussā ca devanāga-
supaṇṇādayo ca samajjadassanattam sannipatimsu. Tatr'ekasmim
thāne eko nāgo ca supaṇṇo ca samajjam passamānā ekato atthamsu.
Nāgo supaṇṇassa supaṇṇabhāvaṃ ajānanto aṃse hattham thapesi.
Supaṇṇo "kena me aṃse hattho thapito"ti nivattitvā olokeno nāgam
sañjāni. Nāgo'pi olokeno supaṇṇam sañjānitvā maraṇabhayaatajjito
nagarā nikkhamitvā nadīpitthena palāyi. Supaṇṇo'pi "taṃ gahe-
sāmi"ti anubandhi. Tasmiṃ samaye Bodhisatto tāpaso hutvā tassā
nadiyā tīre paṇṇasālāya vasamāno divādaratham paṭippassambhanat-
ttham ndakasāṭikam nivāsetvā vakkalam bahi thapetvā nadim
otaritvā nahāyati. Nāgo "imam pabbajitam nissāya jīvitam labhis-
sāmi"ti pakativannaṃ vijahivā maṇikkhandhavannaṃ māpetvā
vakkalantaram pāvisi. Supaṇṇo anubandhamāno taṃ tattha disvā
vakkale garubhāvena agahetvā Bodhisattam āmantetvā "bhante,
aham chāto, tumbhākam vakkalam gaṇhatha, imam nāgam khādis-
sāmi"ti imam'attham pakāsetum paṭhamam gātham āha:

Idh'ūragānam pavaro pavittho selassa vannaṃ pamokkham'iccham,
brahmaṇa vannaṃ apacāyamāno bubbukkhito no visahāmi bhottun'ti.

Bodhisatto udaye thito eva supaṇṇarājassa thutim katvā dutiyam
gātham'āha:

So Brahmagutto ciram'eva jīva, dibbā ca te pātubhavantu bhakkhā,
so brahmavannaṃ apacāyamāno bubbukkhito no vitarāsi bhottun'ti.

Iti Bodhisatto udaye thito'va anumodanam katvā uttaritvā
vakkalam nivāsetvā te ubho'pi gahetvā assamapadam gantvā mettā-
bhāvanāya vannaṃ kathetvā dve'pi jane samagge akāsi. Te tato
paṭṭhāya samaggā sammodamānā sukham vasimsu.

明治四十三年八月二十五日印刷

明治四十三年八月三十日發行

著 作 者 立 花 俊 道

發 行 者 高 島 大 圓

東京市小石川區原町六番地

印 刷 者 佐 久 間 衡 治

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印 刷 所 株 式 秀 英 舍

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

發 行 所 丙 午 出 版 社

東京市小石川區原町六番地
振替口座東京一五六八六番
電話 番町二六〇八番

(定價金壹圓) (不許複製)